

令和5年度 考古学ゼミナール

考古学で探る /
「この世」と「あの世」

10月14日 / 10月21日 / 10月28日

かながわ県民センター



神奈川県埋蔵文化財センター

考古学で探る「この世」と「あの世」

●日 程(各講の後に質疑・休憩)

10月14日(土)		10月28日(土)	
13:00～13:05	開講式	14:00～16:00	第5講
13:05～14:35	第1講	16:15～16:30	修了式
15:00～16:30	第2講		
10月21日(土)			
13:00～14:30	第3講		
15:00～16:30	第4講		

- 会 場 かながわ県民センター 2階ホール
(横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2)

要旨集 目次

- ◆第1講◆ 「縄文人の死生観 - 縄文時代の「この世」と「あの世」 -」 1
東京都立大学 教授 山田 康弘
- ◆第2講◆ 「鎌倉の葬制と東国 - やぐら・石塔と仏教儀礼 -」 9
鶴見大学 講師 古田土 俊一
- ◆第3講◆ 「古墳時代の墓制・葬送儀礼と死生観」 21
専修大学 准教授 小林 孝秀
- ◆第4講◆ 「近世の葬送墓制と祖先信仰」 29
早稲田大学人間科学学術院 教授 谷川 章雄
- ◆第5講◆ 「弥生時代の祖先祭祀と他界観」 38
東京大学 名誉教授 設楽 博己

講師紹介

◆山田 康弘(やまだ やすひろ) 東京都立大学 教授

(専門/研究テーマ) 縄文時代から弥生時代の社会・精神文化/現在は考古学と人類学(同位体・DNA分析など)をあわせた統合生物考古学(バイオアーケオロジー)の確立に注力している。

(著書・論文等)2019『縄文時代の歴史』講談社現代新書、2018『縄文人の死生観』角川ソフィア文庫、2015『つくられた縄文時代-日本文化の原像を探る-』新潮社選書、2014『老人と子供の考古学』歴史文化ライブラリー380 吉川弘文館

◆古田土 俊一(こたと しゅんいち) 鶴見大学 講師

(専門/研究テーマ) 歴史考古学・中世考古学・石造物/鎌倉時代を中心に、中世鎌倉の都市構造を考古学・仏教史などから複合的に研究。

(著書・論文等)2021「僧墓の起源と地下式坑・やぐらの発生」『寺社と社会の接点-東国の中世から探る-』高志書院、2017「瓜ヶ谷 武蔵に通じる道と谷戸」「弁ヶ谷 和賀江島と倉庫群」「鎌倉のやぐら」『鎌倉の歴史-谷戸めぐりのススメ-』高志書院、2016「鎌倉の消費動向-陶磁器組成の変化を読む-」『十四世紀の歴史学-新たな時代への起点-』高志書院、2014「鎌倉の中世石造物と建長寺開山塔-その造塔背景-」『東アジアのなかの建長寺』勉誠出版、2014「江島の中世石碑-「大日本国江島靈迹建寺之記」碑の紹介と分析-」(共著)、2014「中世鎌倉のみちと造塔」『鎌倉研究の未来』山川出版社、2012「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢神奈川』第20集 神奈川県考古学会

◆小林 孝秀(こばやし たかひで) 専修大学 准教授

(専門/研究テーマ) 日本考古学・東アジア考古学/古墳時代東国社会の研究・古代東アジア交流史の研究

(著書・論文等)2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣、2022「関東出土の朝鮮半島系甗」土生田純之先生退職記念事業会編『人・墓・社会-日本考古学から東アジア考古学へ-』雄山閣、2021「倭国の渡来系文物」「壁画古墳(装飾古墳)」鈴木靖民監修/高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』八木書店、2020「つくば市西栗山遺跡出土の多孔式甗-渡来系資料の評価をめぐる視点-」駒澤大学考古学研究室編『生産の考古学 III』(酒井清治先生古稀記念)六一書房、2020「關東北西部の横穴式石室-導入とその系譜をめぐる-」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社など

◆谷川 章雄(たにがわ あきお) 早稲田大学人間科学学術院 教授

(専門/研究テーマ) 近世考古学/近世の葬送墓制の考古学的研究・近世都市江戸の考古学的研究

(著書・論文等)2022「位牌・墓標と葬送」『無縁社会の葬儀と墓』吉川弘文館、2013「近世の墓」『事典墓の考古学』吉川弘文館、2011「江戸の墓誌の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集、2011「江戸の墓と家と個人」『死生学年報2011』東洋英和女学院大学死生学研究所、2009「江戸の六道銭」『六道銭の考古学』高志書院、2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、1989「近世墓標の変遷と家意識」『史観』121 早稲田大学史学会、1988「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』288 ニューサイエンス社

◆設楽 博己(したら ひろみ) 東京大学 名誉教授

(専門/研究テーマ) 日本考古学/縄文弥生時代の社会と文化(とくに葬送制・儀礼の問題)

(著書・論文等)2022『縄文vs. 弥生-先史時代を九つの視点で比較する』ちくま新書1624 筑摩書房、2021『顔の考古学-異形の精神史-』歴史文化ライブラリー514 吉川弘文館、2017『弥生文化形成論』塙書房、2014『縄文社会と弥生社会』日本歴史 私の最新講義 敬文舎、2008『弥生再葬墓と社会』塙書房

縄文人の死生観

- 縄文時代の「この世」と「あの世」 -

東京都立大学 教授 山田 康弘

1：はじめに 「死」とはなんだろうか？

- ・ チンパンジーなどの大型霊長類やニホンザルなどのサルは「死」を理解できない。
- 「死」とは人のみが理解しうる概念である。
- ・ 人はいつから「死」を知ったのか？
- 人類史 700 万年の流れから見た場合、人が「死」を認識したのはさほど古いことではない。
- 墓が人類史的にいつから作られるようになったのが、「死」の認識時期の下限を調べる鍵となる。

2：墓とは何か？

- ・ 遺体を意図的に収納する様々な施設およびその場所のことを、考古学では墓と呼ぶ。
- ・ 最古の墓？と思われる事例は、旧人のネアンデルタール人の段階で見られるが・・・。
- 多くの問題点があり、現在では疑問視されることも多い。確実な事例は、新人のホモ・サピエンスの段階になってから。
- 「死」という概念は、人類史 700 万年の中から見ればきわめて新しい時期に成立したと考えられる。

3：縄文時代とはどのような時代か？（山川出版社『日本史 B』2021 年度版より）

- 1) 今からおよそ 16,000 年～ 3,000 年ほど前（歴博調べ）。
 - 2) 現在とほぼ同じ自然環境。
 - 3) 基本的には食料採取の段階で縄文土器を使用していた。
 - 4) 基本的には 20 ～ 30 人程度の集団で生活。
 - 5) 遠隔地交易を含め様々な情報の交換を行った。
 - 6) 統率者はいても身分の上下関係や貧富の差はなかったと考えられている。
- このように一括して記述されるが、実は時期・地域によって多様な生活があったことが知られている。

4：縄文時代の人々はどのような特徴を持っていたのか？

- 1) 顔高（上顔高）が低い。
- 2) 丸顔でエラが張っている。
- 3) 彫りが深く、鼻が高い。しかめ面。
- 4) 眼窩が四角で、やや目尻が下がる。
- 5) 眉上弓は直線的。
- 6) 身長は大人の男性で158（162）cm程。

○縄文人はホモ・サピエンスであり、その知性・心性も基本的には私たちと遜色ないものであったと考えられている。

5：縄文時代を人類史上にどのように位置づけるのか？

- ・縄文時代は定住的な生活が始まった時代
- ・計画的な集落景観の出現。→環状をなす集落、廃棄場などの計画的空間配置。
- ・さまざまな作業場（インフラ）の整備。→堅果類の加工場、食料貯蔵場所、道など。
- ・様々な社会的ルールの整備。
 - 祭祀や呪術などの発達が発達される。
 - 抜歯や呪術具の発達。精神文化の複雑化を招来する。
 - 墓制の複雑化。

6：葬法にみる縄文時代の死生観

Case1：妊産婦の埋葬例

→特殊な葬法からみる死生観

Case2：新生児段階の土器棺墓への埋葬例

→土器を母胎にみたてて、再生を祈願する。

Case3：多数の遺体を一つの土壌に埋葬する事例

→多数合葬・複葬例にみる死生観のありかた。

7：縄文時代の死生観（「あの世」と「この世」）

- 1) 生命の再生・循環を基調とする死生観
- 2) 人々の歴史的つながり、生命のつながりを意識する系譜的死生観

8：おわりに 現代にも残る縄文的死生観

- ・「千の風になって」にみる縄文的死生観
- ・自然葬などにみる縄文的死生観の復権

主な参考文献

- エリアーデ, M. (堀 一郎訳) 1971 『生と再生-イニシエーションの宗教的意義-』 東京大学出版会
- 清野謙次 1925 「男女生殖器を示し且同時に交接を意味する日本石器時代土製品」『考古学雑誌』第15巻第3号
- 清野謙次 1946 『日本民族生成論』 日本評論社
- 小杉 康 2003 『縄文のまつりと暮らし [先史日本を復元する3]』 岩波書店
- 櫻井徳太郎 1989 「柳田国男の祖先観」『歴史民俗学の構想』 櫻井徳太郎著作集第8巻, 吉川弘文館, (初出は1974・1975『季刊柳田国男研究』第7・8号)
- スミス, R. (前山 隆訳) 1983 『現代日本の祖先崇拜 (下)』 御茶ノ水書房
- 谷口康浩 2006 「石棒と石皿-象徴的生殖行為のコンテクスト-」『考古学』IV
- 水野正好 1974 「土偶祭式の復元」『信濃』第26巻第2号
- 村上重良 1974 『慰霊と招魂-靖国』 岩波新書 156
- 春成秀爾 1996 「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集
- 柳田國男 1946 『先祖の話』 筑摩書房
- 山田康弘 2019 『縄文時代の歴史』 講談社現代新書
- 山田康弘 2018 『縄文人の死生観』 角川ソフィア文庫 (『生と死の考古学』を復刊)
- 山田康弘 2015 『つくられた縄文時代-日本文化の原像を探る-』 新潮社選書
- 山田康弘 2014 『老人と子供の考古学』 歴史文化ライブラリー 380 吉川弘文館

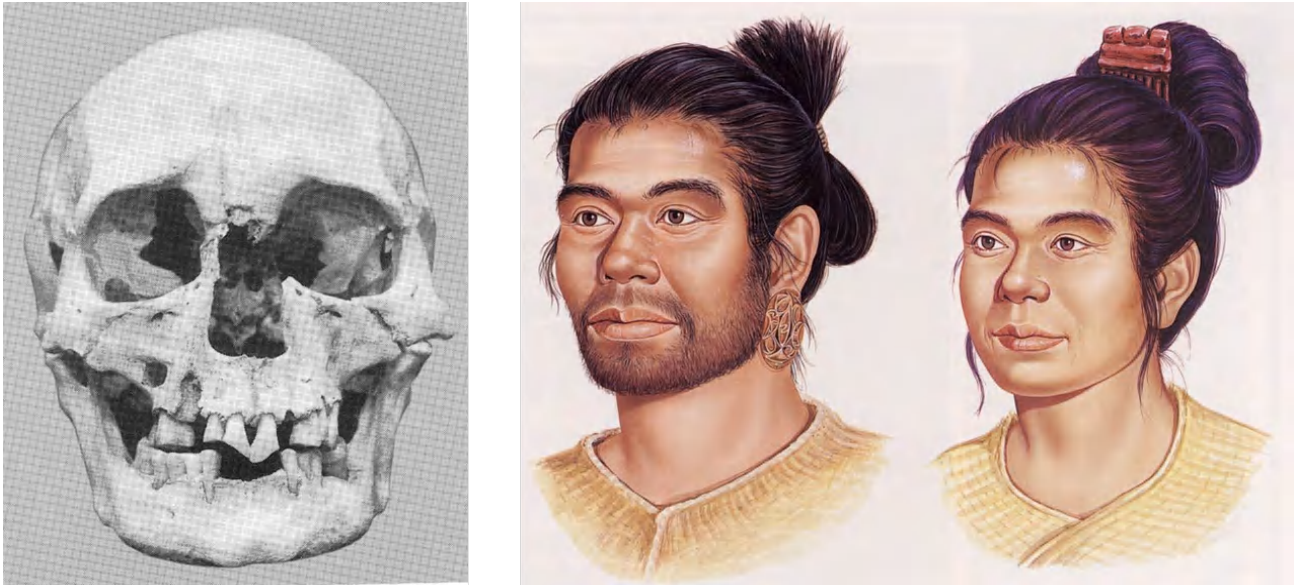


図1 愛知県田原市吉胡貝塚出土人骨と縄文人の復顔想像図



図2 宮城県気仙沼市前浜貝塚出土人骨・犬骨・土器棺



図3 宮城県気仙沼市田柄貝塚から検出された土器棺墓



図4 茨城県中妻貝塚から検出された多数合葬・複葬例



図5 長野県唐渡宮遺跡出土の絵画土器（出産風景？）



図6 山梨県北杜市津金御所前遺跡出土土器と長野県目切遺跡出土土偶

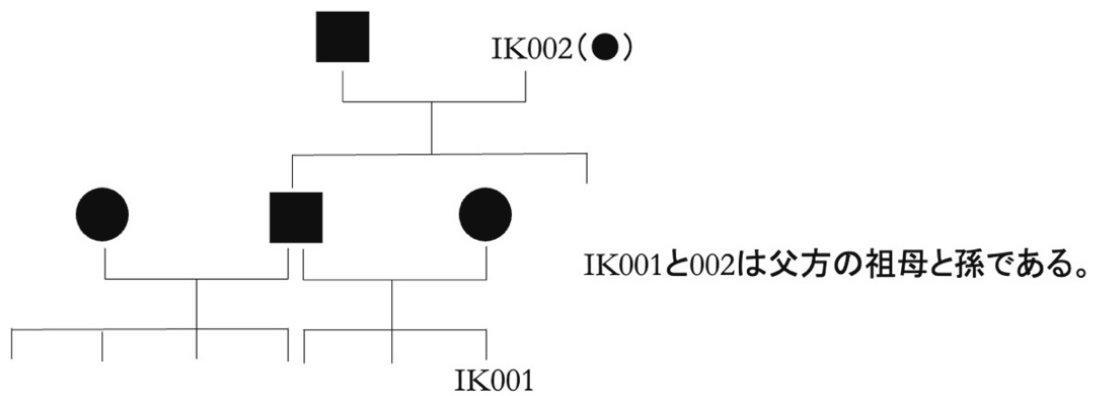
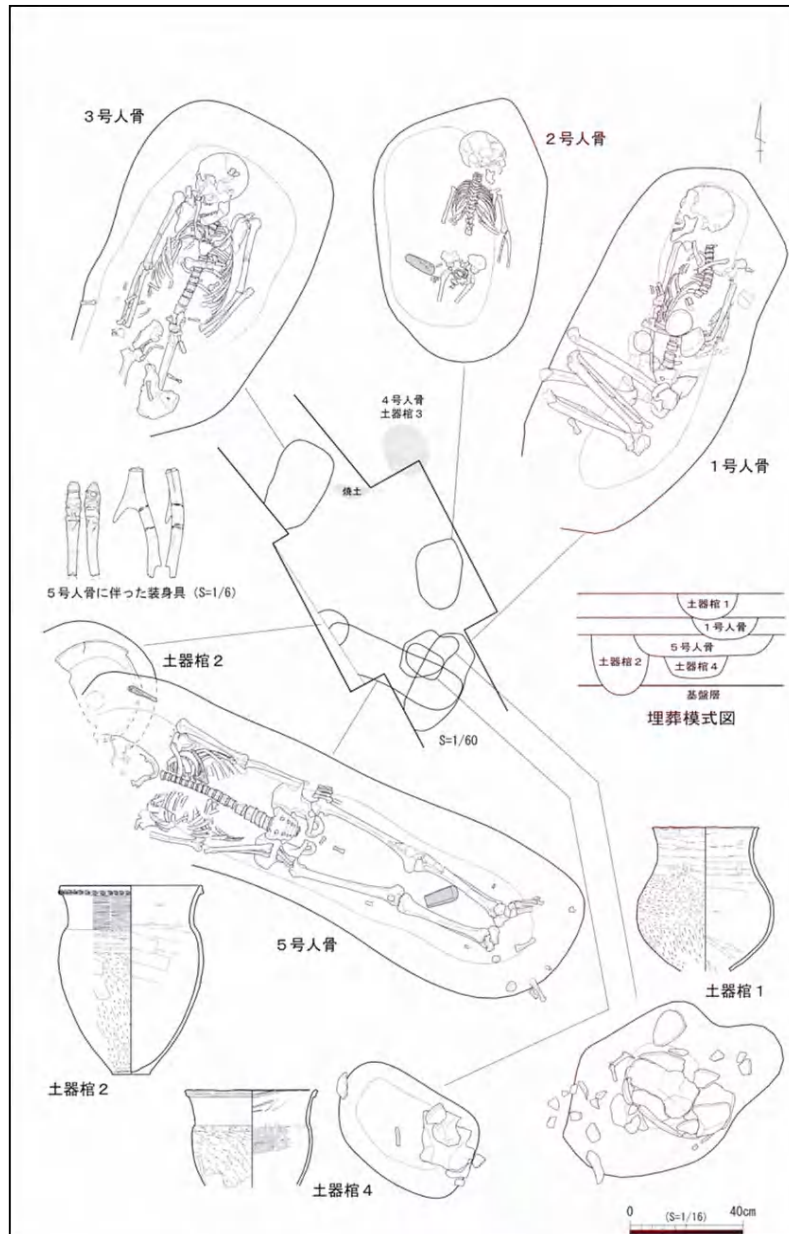


図7 愛知県田原市伊川津貝塚 2010 年度発掘調査出土人骨と推定される関係性

縄文人の精神世界モデル

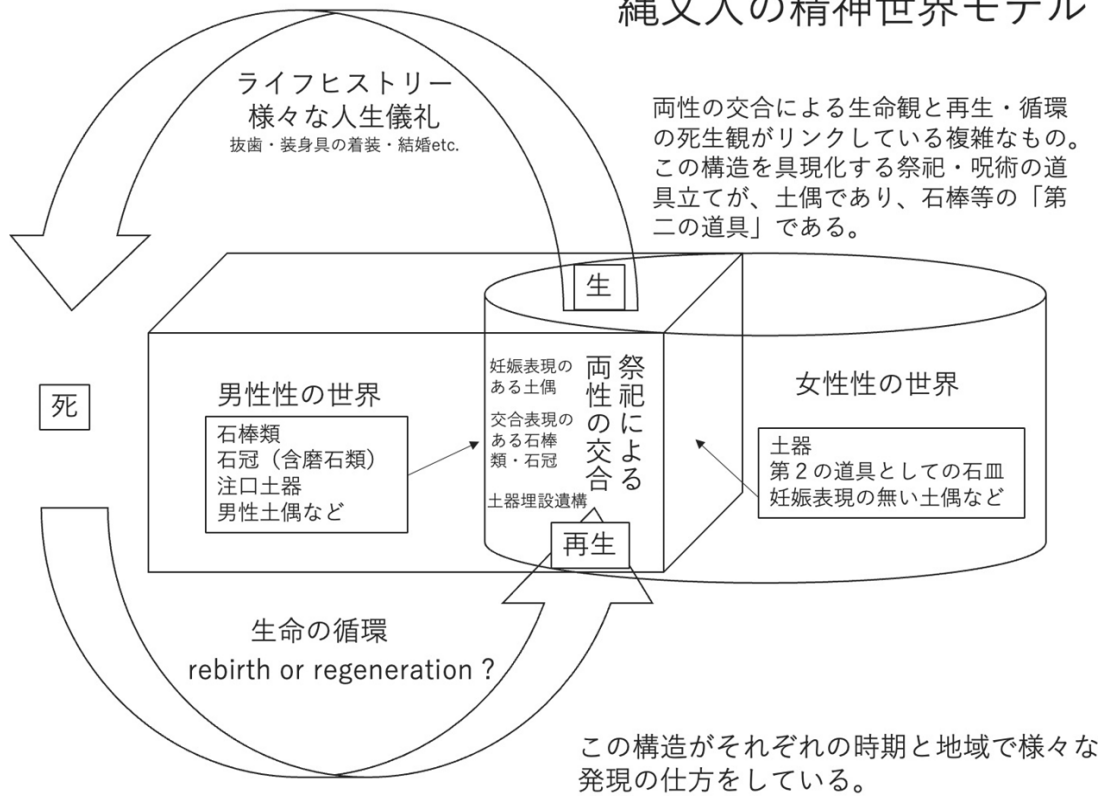
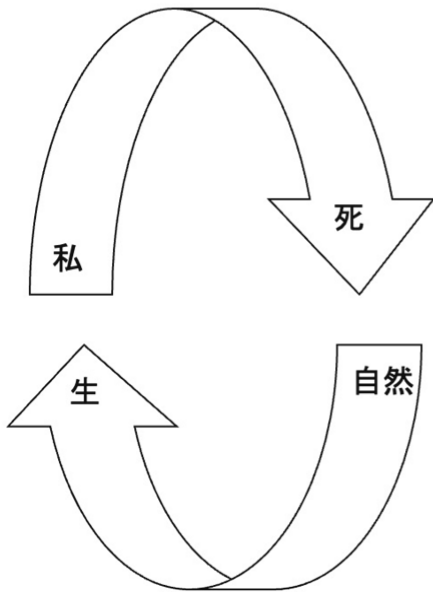


図8 縄文人の精神文化のモデル

再生・循環の死生観



系譜的死生観

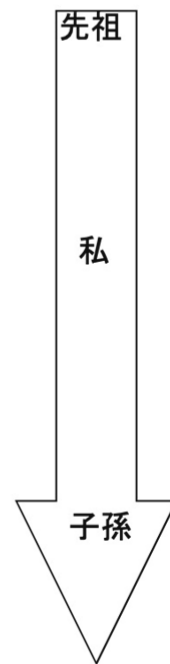


図9 縄文時代の死生観

鎌倉の葬制と東国

- やぐら・石塔と仏教儀礼 -

鶴見大学 講師 古田土 俊一

はじめに

近年の認識における日本の中世とは、おおよそ 11 世紀後半の院政の成立から 16 世紀後半の織田政権の時代までを指す。この時代は、古代以来の朝廷・公家政権に加えて、新たに職業軍人である武士（武家）が政治的権力を持ち台頭したほか、寺社が独自の経済基盤や武力を保持して他の権力と拮抗する力をつけるなど、荘園に代表される重層的な土地の権利関係の発展や生き残りをかけた主従制度のもと、政治権力が分散していった点が特色として指摘されている（石井 2002・高橋 2016）。この中世という時代は、南北朝時代を挟んで鎌倉時代を中世前期、室町時代から戦国時代までを中世後期と区分されているが、このうち中世前期である鎌倉政権発足の 12 世紀末から、鎌倉府の鎌倉公方が古河へ移る中世後期の 15 世紀中ごろまでの期間、東国の政治の中心を担っていた土地が相模国の鎌倉であり、東国において中世を通観することができる好素材とすることができる。

本講座では、これら中世という時代において墓制や葬送儀礼がどう変化していったか、またその根底となる死生観や宗教背景を、文献史料を併用する歴史考古学の手法を用いつつ、武家の都市鎌倉を舞台にみていく。さらに鎌倉に導入された思想や文化が相模・武蔵国にまたがる神奈川県域、ひいては東国へと伝播する中世の様相も追ってみたい。

1. 鎌倉幕府成立期の相模国・武蔵国の葬制（図 1）

平成 17 年（2005）に編纂された『中世墓資料集成』の「神奈川県」の項に取り上げられた中世墓は、661 例を数える。このうち鎌倉幕府成立期となる 13 世紀前半までの事例を抜粋したところ、21 例を拾うことができた（下表）。事例の中には、発見時の調査時の記録が不十分であるものや現在では遺物が失われてしまったケースも散見されることに加え、蔵骨器が伝世した古器を使用する傾向にあることを考慮すると、資料はあくまでも参考扱いとしなければならないが、鎌倉を除く事例はいずれも河川沿いや湾岸の丘陵上など流通の拠点となる土地や、古代から重用されてきた眺望の良い土地であることが多く、火葬骨を蔵骨器に納めて埋葬する状況が看取できる。また蔵骨器も威信財に相当する陶磁器が使用されており、中世武士団などの領主層による墓葬の可能性が想定されるが、幕府が所在した鎌倉でも出土例の少ない優品が含まれていることは、各地の領主層が幕府の介入以前より築き上げた独自のコネクションやネットワークを維持し、各自発展を遂げていたことを想起させる。

◇神奈川県内の13世紀前半までの出土墓例(図1に対応)

No.	名称(所在地)	遺構の概要・出土遺物	年代
1	越路遺跡 (川崎市幸区南加瀬)	火葬骨の蔵骨器として白磁四耳壺の胴部と常滑壺底部が出土。	12世紀末～ 13世紀初頭
2	南加瀬古墓 (川崎市幸区南加瀬)	加瀬白山古墳後円部の下方より火葬骨納入の渥美壺1点(国宝)が出土。	12世紀後半
3	早草上ノ原火葬墓 (川崎市麻生区早野)	宅地斜面から板碑が出土し、下層から蔵骨器が出土。古瀬戸四耳壺1点。	13世紀前葉
4	上台の山遺跡 (横浜市都筑区)	大熊川(鶴見川支流)左岸の舌状台地南端。蔵骨器4基が並んで出土。常滑甕2、渥美壺2	13世紀前半
5	無量寺 (横浜市緑区)	谷本川と恩田川が合流し鶴見川となる地点に突出する宮原台地東斜面から蔵骨器が出土。古瀬戸三耳壺、渥美壺。	13世紀
6	大畑 (横浜市緑区)	谷本川と恩田川が合流し鶴見川となる地点に突出する宮原台地南西斜面上部から蔵骨器が出土。渥美連弁文四耳壺、短刀。	12世紀後半
7	念仏堂(横浜市緑区)	寛元元年(1243)板碑の下から蔵骨器として瀬戸瓶子(推定)が出土。	13世紀中葉
8	由比ヶ浜集団墓地遺跡(鎌倉市由比ガ浜)	前浜の丘陵地南。非火葬の単体埋葬。	13世紀前半～
9	長谷小路周辺遺跡(鎌倉市由比ガ浜)	土坑に仰臥伸展葬1体。鉄鏃6・骨鏃2・刀子・銭3が出土。	11世紀末～ 12世紀末
10	鶴岡八幡宮境内(鎌倉市雪ノ下)	男女合葬墓。木製五輪塔婆2・碑伝4が出土。	12世紀中ごろ 以降
11	八幡社遺跡 (横須賀市久里浜)	久里浜湾を望む砂堆上の古墳時代の墓域。ロクロかわらけ・陶器甕・鉢・天目茶碗・青磁蓮弁文碗が出土。	12世紀末～ 13世紀初頭
12	八幡社遺跡 (横須賀市久里浜)	久里浜湾を望む砂堆上の古墳時代の墓域。常滑甕・渥美甕ほか出土。	12世紀末～ 13世紀前半
13	蓼原東遺跡 (横須賀市明神町)	久里浜湾を望む砂堆基部上より埋葬人骨。渥美甕、常滑甕片など出土。	12世紀末～
14	長沢1号墳経塚 (横須賀市長沢)	津久井浜を望む丘陵突端部を利用した古墳の頂部。土師質の円筒形土器片ほか銭貨15枚などが出土。	12世紀後
15	大浦山洞窟 (三浦市南下浦町)	三浦半島南端東岸の台地南端に石積遺構。骨片とともに須恵質広口壺・山茶碗など出土。	12世紀中葉～ 後葉
16	中ノ原遺跡C地点 (大和市下和田)	境川右岸の相模野台地上の土坑から火葬骨と炭化材を納めた蔵骨器。渥美製経筒を転用。	13世紀
17	渋谷土地区画整理事業内遺跡 (大和市下和田)	境川右岸の相模野台地上の土坑から火葬骨と炭化材を納めた蔵骨器。渥美製経筒を転用。	12世紀後半～ 13世紀前半
18	天神前遺跡第8地点 (平塚市四之宮)	相模川右岸の砂丘上の土坑墓。手づくね、ロクロ成形の坏・緑釉陶器などが出土。	11世紀前半
19	日向・渋田遺跡 (伊勢原市日向)	渋田川と日向川に挟まれた舌状台地上の火葬墓。渥美陶片・常滑陶片・刀子・銭2が出土。	中世前期
20	久野南舟ヶ原遺跡第I地点(小田原市久野)	久野丘陵上の集石墓。船載黄釉瓶・常滑甕・鉢などが出土。	13世紀前葉
21	久野多古境遺跡第I地点(小田原市久野)	久野丘陵南端裾部の火葬墓。常滑三筋壺が出土。	12世紀後半

2. 中世鎌倉の葬制

1) 幕府成立以前の様相 (図 2)

古代の鎌倉は、源頼朝が入部する以前は寒村だったとする認識から一転、今小路西遺跡（御成小学校地点）の発見により、郡家の所在地として人の集住する地域であったことが認知されて久しい（①：河野ほか 1990）。和田塚周辺には明治期の新道建設の際に出土した埴輪片と古墳の存在が知られており、采女塚円墳、向原古墳群の名で呼ばれるほか（②）、古墳時代後期より全国にも広く分布する横穴墓が鎌倉市内の各所で確認され、現在でも開口している例が多く見られる（佐藤 2002）。また平成 28 年には古墳と考えられる石棺墓が長谷小路周辺や材木座周辺より発見されている（③④：齋木ほか 2016）。鎌倉が古墳時代より豪族など支配勢力が居住する重要な地域であったことを補強する資料となった。

中世で最も古い資料は、上表のNo. 10 でも触れた現在の鶴岡八幡宮境内域より出土した男女合葬の土坑墓である（⑤：図 4）。大型の木製五輪塔婆や板碑伝が相伴しており、源頼朝が鎌倉に入る以前、八幡宮造営以前となる 12 世紀中ごろに、板塔婆を立てて埋葬する文化が鎌倉に存在したことを示している。

2) 法華堂・墳墓堂への埋葬 (図 2)

鎌倉でみられる中世初期の葬法のひとつに、「法華堂」「墳墓堂」など堂宇への埋葬がある。源頼朝の法華堂（⑥）や北条義時の法華堂（⑦）といった伝承地が現在でも残されているように、対象者は幕府中枢の要人と縁者に限られた高貴な墳墓といえる。文献史料上の初見は正治元年（1199）の頼朝の女三幡の仏事を「墳墓堂」にて修した記事で、その後、源頼朝、源実朝、北条義時、北条政子、北条時氏、北条経時、将軍藤原頼嗣の御台所（北条経時の妹）と続く。平安期以降一定の社会階層以上の人々の世界で流行した葬法であり、京都の事例で言えば、平正盛の遺骨が眠る常光院を取りこんだ形で清盛の六波羅屋形内泉殿が存在したことは、頼朝法華堂と大倉幕府の関係に通じるものがあるだろう（高橋昌 2011・高橋慎 2016）。

このうち北条義時法華堂の推定地では平成 16 年に発掘調査が実施され、山腹を造成した平場の中央に、雨落ち溝を配した三間四方の礎石建物跡が検出された（図 3）。建物の規模は、一辺が 28 尺（8.4 m）で、幅 4 尺（1.21 m）の縁が巡り、瓦葺であったと想定されている。建物の廃絶時期は、13 世紀末～14 世紀初頭と判断され、弘安三年（1280）、または延慶三年（1310）いずれかの火災を最後に廃絶したと考えられている。出土遺物には、高麗青磁の梅瓶や青白磁の水注など高級品の破片も含まれ、格式の高い建物であったことが明らかとなっている。

この法華堂・墳墓堂の文化は、寛元 4 年（1246）の経時墓を境に新造された記録は無くなるが、追葬などを含め、少なくとも 13 世紀中ごろまでは確実に存在した、初期の事例である。

◇『吾妻鏡』にみる法華堂・墳墓堂の造営

日付	概要
正治元年(1199) 7月6日	同年6月30日に亡くなった頼朝の女三幡の仏事を墳墓堂において修した。葬られた中原親能の亀谷堂を指すか。
正治2年(1200) 1月13日	源頼朝一周忌仏事を「彼の法華堂」で修した。建久10年(1199)4月23日の百ヶ日が行われた頼朝の持仏堂が法華堂となったか。
承久3年(1221) 1月27日	源実朝の三回忌を法華堂において修した。実朝は承久元年(1219)1月28日に勝長寿院の傍らに葬られている。
貞応3年(1224) 6月18日	故右大将家(頼朝)法華堂の東の山上をもって墳墓となすとあり、同年8月8日に「故奥州禪室(義時)墳墓堂[新法花堂と号す]」として落慶供養。
嘉祿2年(1226) 4月4日	源頼朝、源実朝、北条政子の3つの法華堂へ如法経を奉納した。政子は嘉祿元年(1225)7月12日に勝長寿院の御堂御所の地で火葬されている。
寛喜2年(1230) 6月18日	北条泰時の子である時氏が亡くなり、大慈寺の傍の山麓に葬られる。同年9月18日に「墳墓堂供養」とある。
寛元4年(1246) 閏4月2日	北条経時が亡くなり、佐々目山麓に葬られ、翌年3月20日に「墳墓梵宇」にて一周忌が営まれた。
宝治元年(1247) 5月14日	将軍藤原頼嗣御台所(北条経時の妹)が亡くなり、経時の墳墓の傍らに葬られた。

3) 浜への埋葬(図2・図5)

幕府要人の葬制に対して市井の墓と考えられているのが、海浜地域への埋葬である。多くが非火葬で、単体・少数・多数集積・頭部などの部位など埋葬形態は様々だが、副葬品なども簡素な埋葬である。そもそも13世紀前半期までの埋葬遺構は市内全域でも検出が非常に少なく、ほぼ海浜地域に限定される傾向がみられ、多くが非火葬の単体埋葬である(松葉2016)。13世紀前半～後半までは、浜の土地自体が他の目的で利用される様相も見られず、少ない事例ながら埋葬のみが行われる土地であった。これが14世紀前半を中心とした前後の時期になると、浜に倉庫と考えられる竪穴建物が多数建造されるようになる。これにより埋葬地域は消失するわけではなく、倉庫と併存し、埋葬も隆盛期を迎える時代となる。最多例の由比ヶ浜南遺跡では531群(約4000体)が出土しており、倉庫の隣に人が埋葬される風景が広がっていたことになる。

一方で、文献史料には戦による遺体の集積や首を晒す場所として浜・浦の名が記される。これは片瀬、腰越、六浦も同様で、これらの地域が鎌倉の境界地であったことと関係する。死の穢れを都市内部(鎌倉中)に持ち込まないことが重視されたと想像される。現代でも各地域の墓地は境界地に所在することが多く、ほか、道祖神などのように峠(坂)などの境界地には境の神(さえのかみ)を奉り、御霊神・行疫神の侵入を防ぐ信仰がみられる。それらの場所はその世とこの世の境とも考えられており、地獄の入口として十王(閻魔)や地藏を奉る事例も多い。

4) 山への埋葬…やぐらの造営(図6・7・8・9・10)

墓所となる境界地は海のほかに山稜がある。13世紀後半ごろから山稜や裾野の谷戸に造営され始める「やぐら」は、崖面に穿たれた「窟」形態を最大の特徴とする横穴式の中世墳墓および供養施設と考えられる遺構である。鎌倉を中心に、分布を南関東にほぼ限定して15世紀後半まで造営されたと考えられており、出土遺物などから、被葬者は僧侶や御家人クラスが想定されている(河野

◇『吾妻鏡』にみる浜地への死体の遺棄

日付	概要
治承4年(1180)10月26日	固瀬河の辺りにおいて大庭景親が梟首された。
治承5年(1181)4月19日	腰越浜の辺りにおいて囚人平井紀六を梟首した。
文治2年(1186)閏7月29日	静御前が男子を出産した。これは源義経の子であったため安達新三郎に命じて、由比浦に棄てさせた。
建久3年(1192)2月24日	武蔵国の六連(六浦)の海辺において、囚人上総忠光を梟首した。
建暦3年(1213)5月3日	由比浦の汀に仮屋が構えられ、「義盛以下首」の首を取り集めた。
建暦3年(1213)5月4日	「固瀬河邊」に晒された首は234に及んだ。

2013)。

名称…初出は『玉舟和尚鎌倉記』〔正保四年(1647)〕で、寿福寺畫やぐらの項に「窟ノ内ニハ古へ画ヲカキタル跡アリ。故ニ絵書櫓ト云ナラハス也。」とある。

語源…地元民の呼称(『鎌倉攪勝考』)。武器を収納した倉か。「矢倉」「いわくら」の訛とも。

分布…およそ南関東。鎌倉を中心に三浦半島、房総半島南部に集中(303遺跡1493例)。西限は二宮町、北限は川崎市麻生区。鎌倉市内には2000基以上が存在しているとも言われる。

全国の種類…宮城県、福島県、山梨県、富山県、石川県、大分県など。

立地…山腹を崖状に整形し造営。200基以上の群集、単立などさまざま。

形態…玄室と羨道部で構成。前庭部を持つ例も。玄室の形状は方形、長方形が基本。

系譜…古代の横穴墓との関連性は否定。中国石窟文化の影響が示唆される。

この遺構の発生は突発的であり、古代の遺構との関連も否定されていることから、なにかしらの外的要因によって成立したと考えられている。この要因について注目したいのが、13世紀中ごろに鎌倉に導入された「宋代仏教」である。平安時代末期、権力と癒着し崩壊する日本仏教を立て直すため最新の仏教を中国に求めた入宋僧は、南宋五山を中心とする南宋江南地域において、禅僧、律僧、天台僧など自分の立場に重きを置きつつ行われる宗派を超えた寺院間交流のもと、寺院での規範(清規)に則った集団生活を重視する修行法を持ち帰る。こうした中国の修行法を日本で実践するため、入宋僧や中国からの渡来僧は南宋と同じ構造の建物・道具を必要とし、宋風伽藍(禅宗伽藍)の建造や宋風文化の導入につながる(西谷2018)。墓制もその文化の一つであり、中国の伝統思想である儒教の儀礼を融合した葬法は、地上に墓塔を有し、地下に空間を作るなど、現代日本の墓葬に繋がるような構造であった。同時期に南関東へ広がる「地下式坑」という地下室遺構や上記のやぐらも、もしかしたらこの文化による産物なのかもしれない。

3. 石造物文化の導入（図 11 ほか参考図）

上記の宋風仏教の導入も相まって、東国全域へと広がった葬送文化に石塔がある。日本への石塔の導入は、早いもので7世紀後半と考えられる滋賀県の層塔が知られるが、列島各地まで浸透するには中世を待たなければならなかった。特に東国の石塔普及の契機となったのが、13世紀後半の鎌倉である。

鎌倉最初期の石造物資料は板碑である。導入時期はおおよそ13世紀第3四半期で、著名な資料として長谷寺の弘長2年（1262）銘の緑泥片岩製板碑、同年銘の光明寺、五所神社の双碑となる雲母片岩製板碑が知られる。緑泥片岩は埼玉県の秩父地方を原産とし、雲母片岩は茨城県の筑波周辺を産地とするが、特に雲母片岩製板碑は鎌倉に定着しなかった。一方の緑泥片岩製板碑は、多少受け入れられはしたようだが、同じ神奈川県内の横浜・川崎の一帯で確認されている数量が5000基を超えるのに対し、鎌倉内では200基を数えるに留まっている（村山2013）。

これに代わって台頭したのが、三浦層凝灰岩や伊豆・箱根系安山岩を使用した石造物であった。在地の石材である三浦層群の凝灰岩は、銘文が無く導入の時期や背景に不明な点が多いため検討は困難であるが、伊豆箱根系の安山岩の導入時期は13世紀後半であると理解されている（三瓶2010）。鎌倉市内に限定して見ると、最古の銘を有する安山岩製石造物は九品寺の所蔵する薬師如来坐像（永仁4年〔1296〕銘）になるが、これに先行して鎌倉近郊である逗子神武寺に鶴岡八幡宮の舞楽師であった中原光氏を弔う石仏、弥勒菩薩坐像（正応3年〔1290〕銘）が造立されている。

ただし、東国の石造物隆盛の嚆矢となった石造物は、14世紀初頭に造立された極楽寺開山忍性の墓塔となる五輪塔である。鎌倉での隆盛には東大寺復興（治承五年〔1181〕～）のため宋から招聘された、宋人石工の系譜を継ぐ伊派・大蔵派といった石工集団が関与しており、これを率いた人物が西大寺流律宗の僧侶、忍性であったとみられている（山川2006）。

この伊豆・箱根系安山岩から造り出される種類は多く、五輪塔・宝篋印塔・無縫塔・宝塔・層塔・石仏、果ては板碑などがあり、これらの塔は中世・近世を通じて全国に浸透し、現在でも墓塔や供養塔として全国各地で生産されていることは誰もが知るところであろう。

おわりに

中世を通じて東国における武家の政権の拠点都市として発展した鎌倉は、公方を失った15世紀半ばを境に衰退を迎える。都市内での埋葬数は一気に減少し、海浜の埋葬地域から外れた場所への土葬や、既存のやぐらへの土葬による追葬、葬地ではなかった市街地で埋葬が見られることなど、おそらくは暗黙の了解であった都市の規律が乱れていく様を読み取ることができる（冨永2013・松葉2013）。主をなくした都市の機能が解体されていく様相は、葬制の面にも表れていると解釈することもできるだろう。

主な参考文献

- 石井 進 2002 『日本の中世1 中世のかたち』中央公論新社
- 高橋慎一郎 2016 『日本中世の権力と寺院』吉川弘文館
- 中世墓資料集成研究会 2005 「神奈川県」『中世墓資料集成—関東(2)—』
- 佐藤仁彦 2002 「中世鎌倉における遺骸の扱われ方」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院
- 斎木秀雄ほか 2016 『長谷小路周辺遺跡』株式会社斉藤建設
- 齋木秀雄 2002 「都市鎌倉と死の扱い—由比ヶ浜南遺跡の調査—」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院
- 吉田章一郎 1985 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)』鶴岡八幡宮境内発掘調査団・鎌倉市教育委員会
- 河野真知郎ほか 1990 『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』同調査団・鎌倉市教育委員会
- 高橋昌明 2011 『改訂増補 清盛以前』平凡社
- 松葉 崇 2016 「中世鎌倉の葬送—海浜地域を中心として—」『考古学から見る中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
- 松葉 崇 2013 「中世都市鎌倉に見る砂丘地の葬送」『青山考古』第29号 青山考古学会
- 五味文彦 2002 「文献から見る鎌倉の死の様相」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院
- 勝田 至 2010 「文献に見る墳墓堂—地上建造物をもつ墓の変遷—」『古代・中世の墳墓堂を考える』資料集 中世葬送墓制研究会
- 松尾宣方・福田誠ほか 2005 『北条義時法華堂跡確認調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 大三輪龍彦 1977 『鎌倉のやぐら』かまくら春秋社
- 田代郁夫 1990 「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
- 河野真知郎 2013 「中世都市鎌倉と「やぐら」」『墓の考古学』吉川弘文館
- 西谷 功 2018 『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版
- 古田土俊一 2021 「僧墓の起源と地下式坑・やぐらの発生」『寺社と社会の接点』高志書院
- 服部清道 1965 『鎌倉の板碑 鎌倉国宝館論集 九』鎌倉国宝館
- 村山 卓 2013 『板碑から中世鎌倉を考える』NPO 法人鎌倉考古学研究所
- 川崎市教育委員会 1993 『川崎市史 通史編』
- 佐々木健策 2009 「南関東の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 三瓶裕司 2010 「矢穴法量の変遷について—伊豆・箱根系安山岩の矢穴から—」『神奈川考古』第46号 神奈川考古同人会
- 山川 均 2006 『石造物が語る中世職能集団』山川出版社
- 川勝政太郎 1967 川勝政太郎 1967 『石造美術入門』社会思想社
- 本間岳人 2012 「南関東」『中世石塔の考古学』高志書院
- 富永樹之 2013 「鎌倉市域における中世の火葬墓、土葬墓—やぐら、砂丘地埋葬以外の様相—」『青山考古』第29号 青山考古学会



図1 神奈川県内の13世紀前半までの出土墓例（藤沢市『相模古代交通網復元図』に加筆）

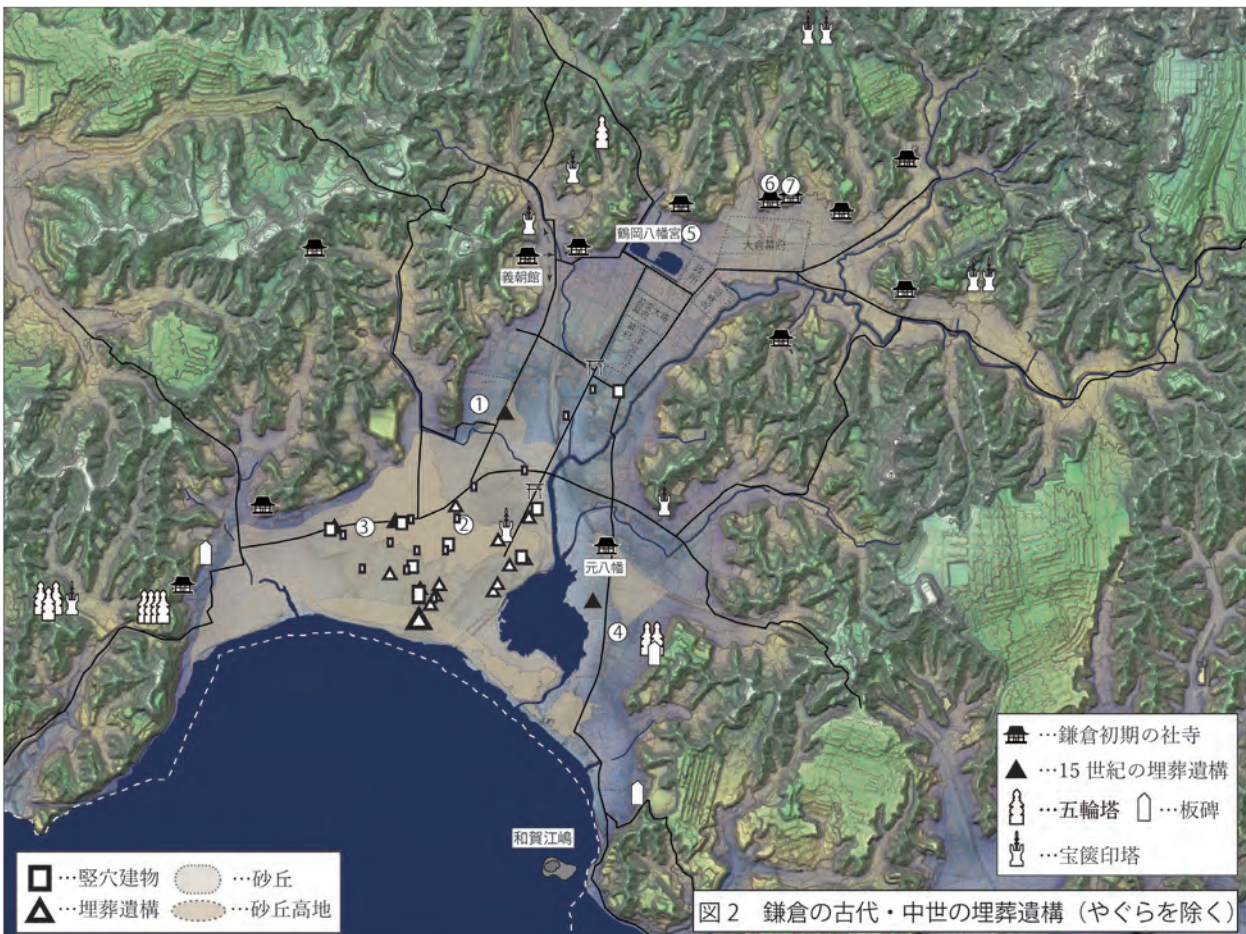
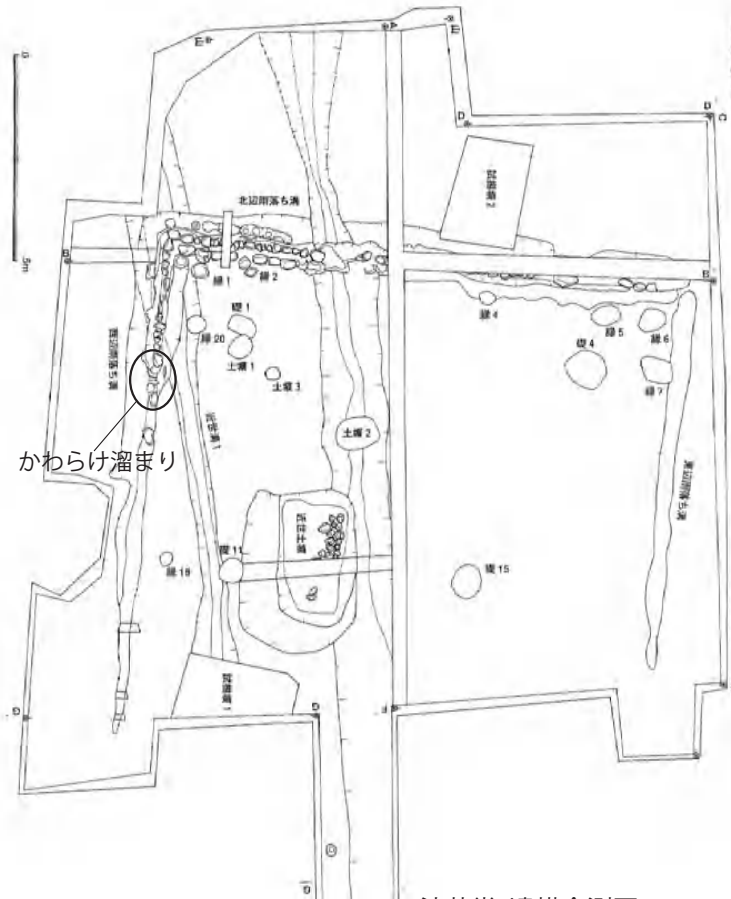


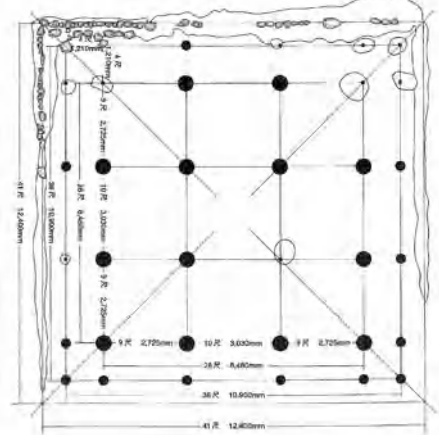
図2 鎌倉の古代・中世の埋葬遺構（やぐらを除く）



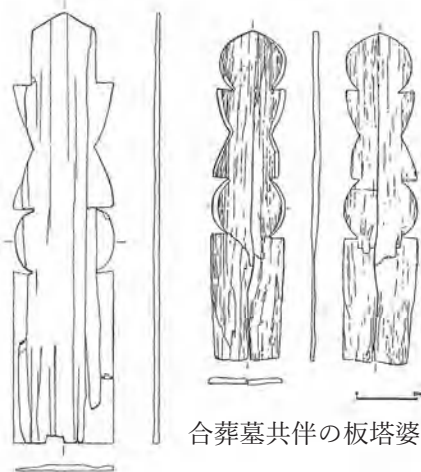
法華堂 遺構全測図

図3 北条義時法華堂の調査

- ・平成17年頼朝法華堂跡の東に位置する丘陵山腹の平場を発掘調査。
- ・山腹を造成した平場に、雨落ち溝を配した礎石建物跡を検出。
- ・一辺が28尺(8.4m)となる方三間(9尺-10尺-9尺)の堂宇を検出。
- ・幅4尺(1.21m)の縁が巡る瓦葺を想定。
- ・出土遺物は高麗青磁梅瓶、青白磁水注などもあり。
- ・建物の廃絶は13世紀末～14世紀初頭か(弘安三年(1280)、延慶三年(1310)か)。雨落ち溝の機能停止に伴う遺物から判断。



法華堂跡柱間寸法



合葬墓共伴の板塔婆

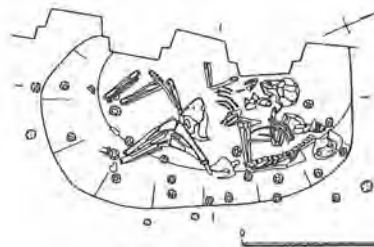
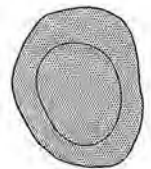
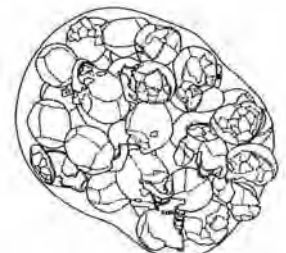


図4 鶴岡八幡宮境内出土 男女合葬墓



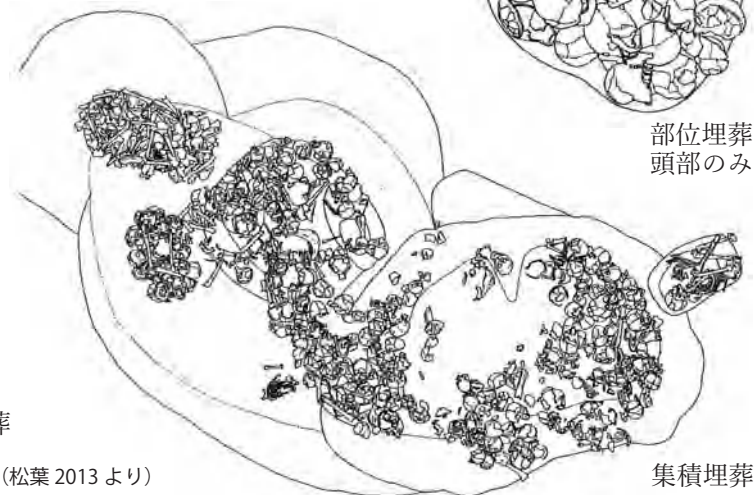
火葬骨埋葬



部位埋葬
頭部のみ



単体埋葬



集積埋葬

図5 由比ヶ浜出土の各種埋葬墓の形態 (松葉2013より)



図6 南関東やぐら分布図 (カシミール3D地図を使用)



図7 鎌倉および周辺地域やぐら分布図

- ・千葉県史料研究財団 1996 『千葉県やぐら分布調査報告書』・横須賀考古学会 2010 『三浦半島考古学事典』
- ・かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム 2003 「神奈川県内の「やぐら」集成」『かながわの考古学 8』
- ・安生素明 2003 「中世鎌倉地域の葬送一やぐらを中心として」『駒沢考古 29』駒澤大学考古学研究室

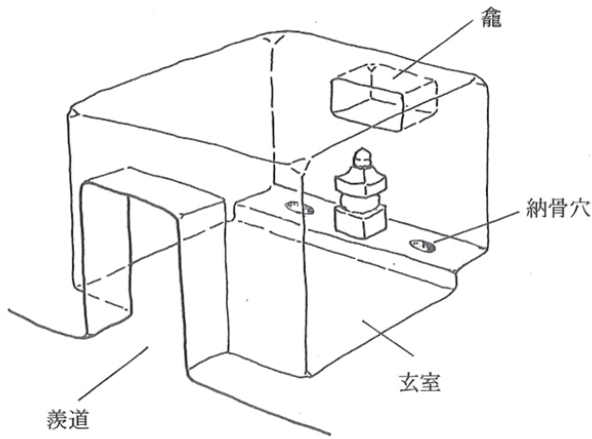


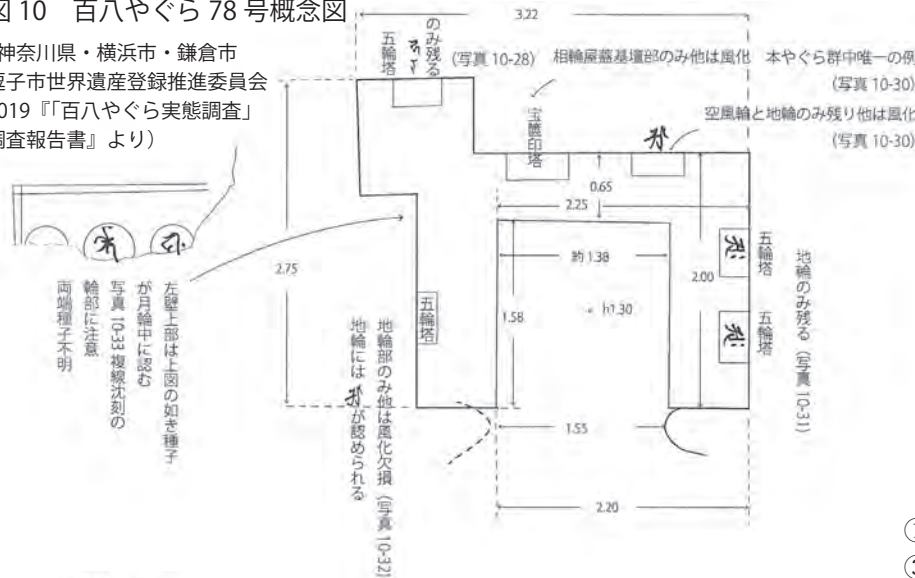
図8 やぐら概念図 (『三浦半島考古学事典』より)



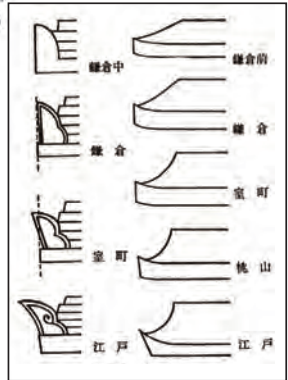
図9 百八やぐら分布図 (部分) (『覚園寺保存管理計画』より)

図10 百八やぐら78号概念図

(神奈川県・横浜市・鎌倉市
逗子市世界遺産登録推進委員会
2019『百八やぐら実態調査
調査報告書』より)

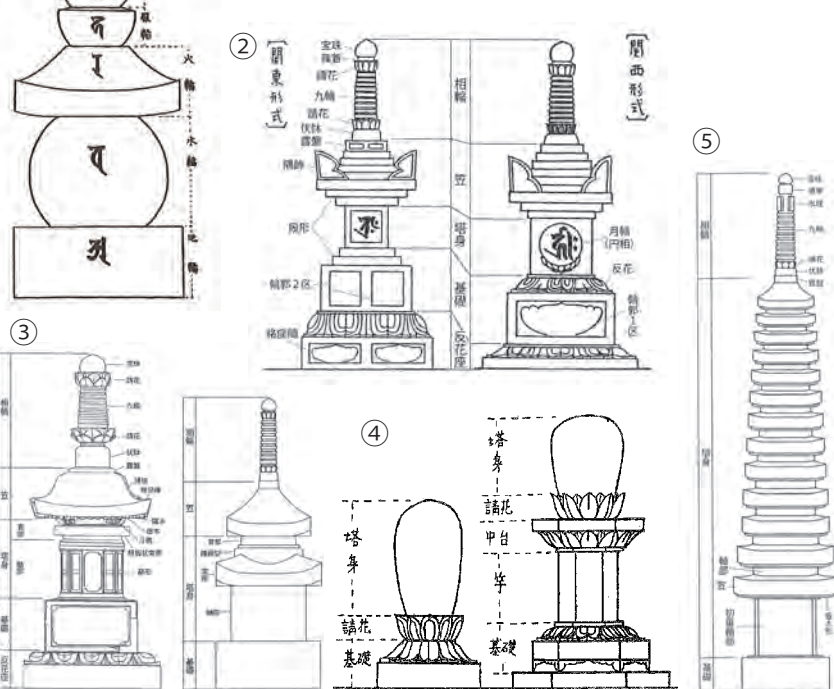


参考 石塔形式からの年代判定 (川勝 1967)



- ①五輪塔、②宝篋印塔
- ③宝塔・多宝塔、④無縫塔
- ⑤層塔、ほか石仏がある。

図11 主に14世紀より東国に波及する石塔の種類



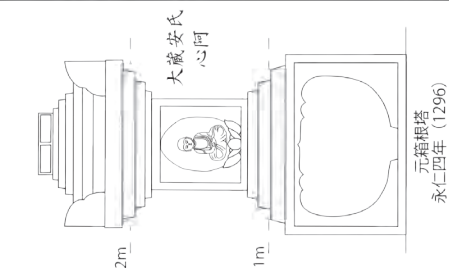
年代	形式	例
1200	五輪塔	鎌倉中
1250	宝篋印塔	鎌倉前
1300	宝塔・多宝塔	鎌倉
1350	無縫塔	室町
1400	層塔	桃山
1450	石仏	江戸

年代	形式	例
1200	五輪塔	鎌倉中
1250	宝篋印塔	鎌倉前
1300	宝塔・多宝塔	鎌倉
1350	無縫塔	室町
1400	層塔	桃山
1450	石仏	江戸

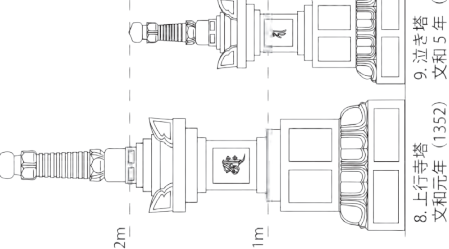
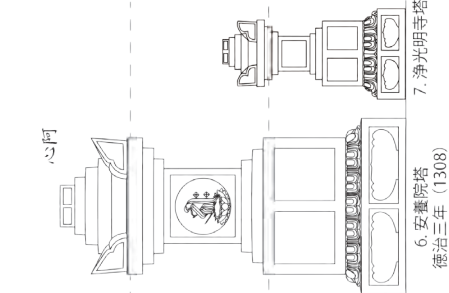
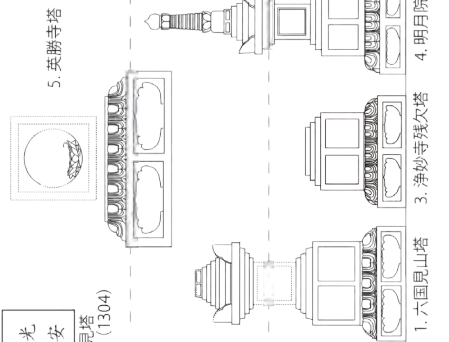
南関東における反花座の変遷
年代判定の参考 (本間 2012)

鎌倉の宝篋印塔
五輪塔

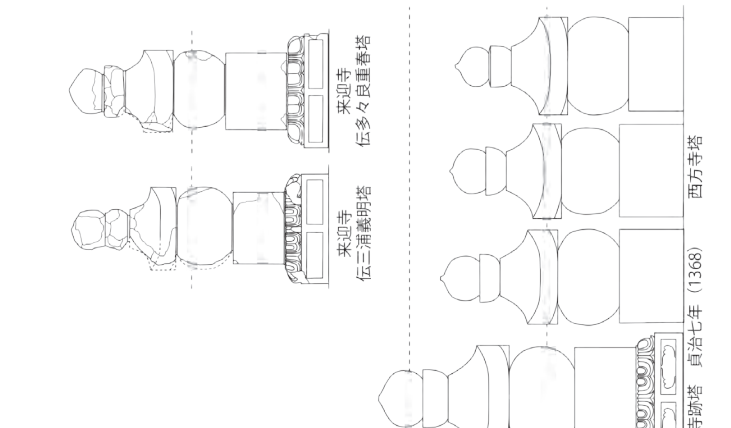
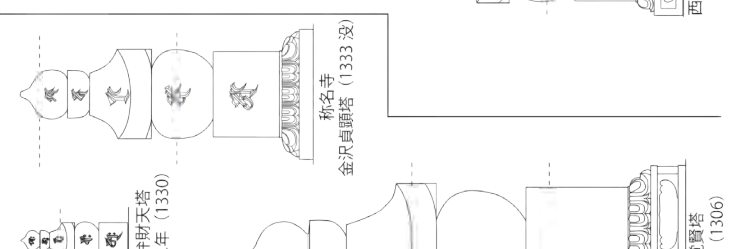
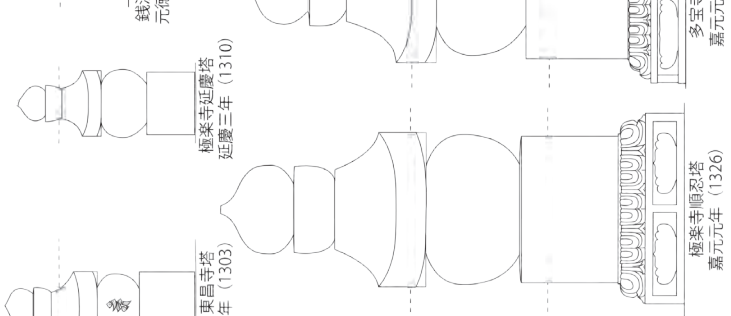
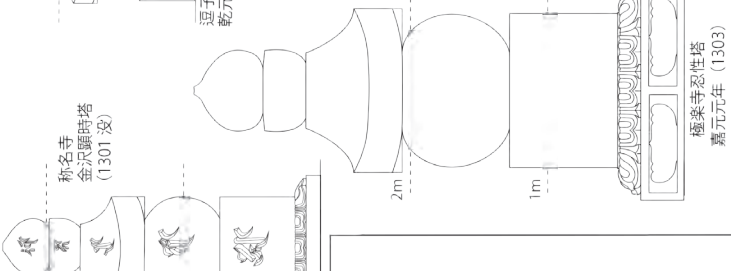
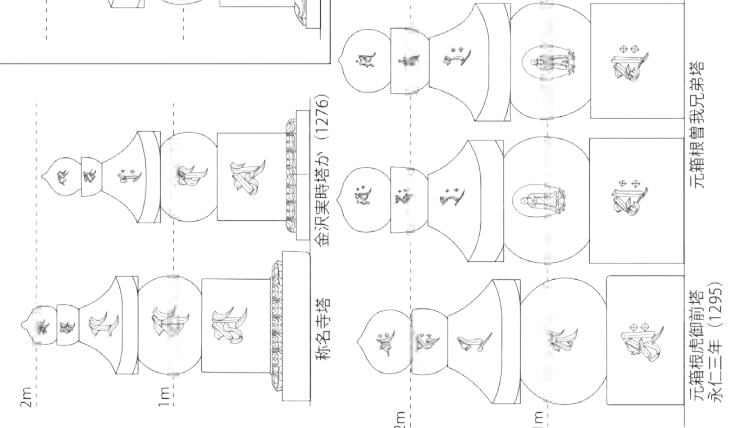
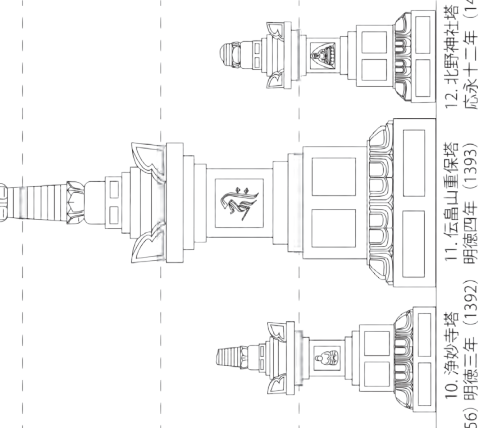
1300



藤原頼光
大藏貞安
大井町金見塔
嘉元元年 (1304)



1350



古墳時代の墓制・葬送儀礼と死生観

専修大学 准教授 小林 孝秀

1. 古墳時代の信仰・精神世界を探る視点

古来より日本列島では、自然は多くの恵みを与えてくれる存在であるとされ、「八百万の神」と呼ばれるように、あらゆる事物・事象には神が宿ると考えられてきた。一方で、自然は脅威や災害をもたらす存在でもあるという、畏怖の念も抱かれていた。人々は、このような自然に対して、恩恵を得たり、脅威を避けたりするための働きかけとして、神を祀る行為、すなわち「神まつり」を執り行なった。こうした自然への祈りの行為が後の神道の信仰に結びつくが、その原型が形作られたのが、まさに古墳時代であった。

(1) 古墳が造られた時代とは

古墳時代とは、「巨大な墓＝古墳」が築造されたことに象徴される時代である。弥生時代までの地域色をもつ墓とは異なり、前方後円墳という墳形が日本列島各地に波及するが、その発信源が近畿地方を基盤とするヤマト王権である。墳丘の規模や形によって身分秩序を反映させる一方で、葬送儀礼の共有などを通して、ヤマト王権と各地の首長が結びついた連合体制として位置づけられ、まさに日本の古代国家が形成された時代であると評価できる。

ところが、古墳がもつ政治的な性格の他に、本来の墓としての性格を看過することはできない。死者のために副葬された品々、諸儀礼に関わる道具立ては、当時の共有された死生観、精神世界を物語る重要な資料であると考えられる。

(2) 古墳時代の精神世界

このように、古墳時代には自然に対する神まつりの祭祀を行なう一方で、巨大な古墳を築いて、死者を葬り、副葬品の埋納やさまざまな儀礼を執り行なうなど、これらは現代の私たちからすると、異様ともいえる行為の数々である。しかし、自然の脅威や人の死に際して、それらをマジカル(呪術的・魔術的、または幻想的)に乗り越えようとし、それが成し遂げられていた世界、それが古墳時代である。

2. 神まつりの世界

人々が神まつりを行なう対象には、山や巨石、峠、河川・水路、海などがある。その痕跡として、鏡や勾玉などの玉類、剣・斧・刀子などの武器・工具類の形を真似て作った石製の模造品が多く見つかるが、これらは実用品ではなく、神に捧げるための祭具と考えられる。小さな孔があげられているが、何かに吊り下げられたと推定できる。他に、土製・木製・鉄製の模造品もあり、さらには神に捧げる飲食物を入れたと考えられる土器も多く出土するが、特に粗雑な作りのものが多いのが

特徴である。

(1) 自然を対象とした信仰の姿と形

山・巨石と神まつり 山の信仰には、神が鎮座する山そのものが信仰となるものが多い（写真1）。特に、神奈備型とも言われるが、円錐の形をした山が多いのが特徴といえる。また、山頂や中腹、山麓などに散在する巨岩は磐座と呼ばれ、神が降臨する申請な場所であると考えられていた（写真2）。

水・河川・海と神まつり 水・河川の信仰には、自然の河川や人工の水路・導水施設、井泉などを対象とし、生活に必要な水の恵みを安定的に得たり、水害などの猛威を回避したりするための施設がある。特に、河川・水路沿いでは、高床倉とみられる総柱式掘立柱建物跡が検出される例があるが、その性格として、幣帛・神饌（神への捧げもの）を下げて収納する施設であった可能性が考えられている。主に水辺に位置する遺跡であるため、木製品が水に浸った状態で腐らずに残って出土し、こうした木製品を用いた祭祀の内容を知ることができる貴重な資料となる。また、海への信仰としては、漁撈・航海への安全祈願などがあるが、玄界灘に浮かぶ宗像・沖ノ島の祭祀遺跡などは有名である。

(2) 海の祭祀と海洋民の墓

関東地方の房総半島南部（安房）や三浦半島では、海蝕洞穴と呼ばれる海岸の洞穴を利用した墓が見つかっており、海洋民の墓制・葬送儀礼の事例として注目できる。房総半島南部に着目すると、当地では館山市つとるば遺跡をはじめ、海を対象にした神まつりの痕跡が窺える遺跡が多く確認されている。館山湾を一望できる立地環境にある大寺山洞穴遺跡（第1洞）からは、発掘調査の結果、舟の形をした棺が12基出土している（写真3・4，図1）。出土遺物には、土器・武器類などのほかに甲冑があるが、これは有力な首長など限られた者しか保有できなかったものである。舟の形をした棺や甲冑の副葬は、海を拠点に活躍した首長像を推定できる。加えて、古墳に葬られてはならず、海との関わりを象徴した墓制、他界観を窺うことができる。

3. 古墳と儀礼

これまで自然に対する神まつりを取り上げてきたが、次に古墳そのものに注目してみたい。古墳とは、規模と形、さらにはその荘厳さをもって被葬者の権威や地位を人々の視覚に訴える装置である。墓が重視されるとともに、その機能を最大限に発揮したのが、まさに古墳時代の特徴といえる。このように、古墳を中心に据えた死生観の共有を通して、王権と列島各地が結び着いていた。では、当時の人々は、死者に対して、どのような願いや祈りを込めて弔ったのか。埋葬された副葬品、葬送儀礼に用いられた儀器の様相から、儀礼の実態や当時の精神世界を探ってみる。

(1) 鏡と石製品の副葬

「魏志倭人伝」（『三国志』魏書東夷伝倭人条）によると、邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏に使者を送り、「親魏倭王」の称号とともに、銅鏡百枚が与えられたとされるが、これが古墳から出土する

三角縁神獸鏡であるとする考えがある。卑弥呼は旧来の銅鐸を用いた祭祀をやめ、替わってこの神獸鏡を各地の首長に配布することで信仰や死生観を共有し、新たな宗教的統治を成し遂げたとされる。また、古墳が成立すると、竪穴式石室内に設けた長大な割竹形木棺の中に、死者とともに、鏡を大量に副葬するようになる（図2）。さらに、石室の壁面や木棺内には朱が塗られ、遺骸を囲むように配置された鏡には、埋葬された死者を邪悪なものから守る「辟邪」の役割があったと考えられる。また、前期古墳の代表的な副葬品として、鏡の他に石製品がある。なかでも、腕輪形石製品には石釧・車輪石・鍬形石の3種があるが、これらはそれぞれ弥生時代における南海産の貝製腕輪の形を石で模倣したものであり、古墳への副葬のために製作された。多量に埋納された例も多く、鏡の副葬と同様に、死者を守るという辟邪の意味があったと位置づけられる（図3）。

（2）古墳の創出と葬送儀礼

古墳時代はいつから始まったのか、その時期をめぐっては現在も議論が続いているが、少なからず奈良県桜井市箸墓古墳の出現が1つの大きな画期となったことは、意見の一致をみている。

さて、箸墓古墳からは、特殊器台・特殊壺、二重口縁壺などが出土しているが、これらは古墳で行なわれた葬送儀礼の性格を物語る資料である。なお、弥生時代における吉備地域（岡山県）の墳丘墓から出土する特殊器台・特殊壺、および飲食器類は、葬儀の参列者による「共飲共食儀礼」の痕跡であると評価される。共同体の参列者が死者を弔う際に、神人共飲共食儀礼を行ない、一体化を図ることで連帯感を高め、人の死を幻想的に乗り越えようとする儀礼であるが、その道具立てが古墳にも取り込まれたことを示すと考えられる。箸墓古墳出土の特殊器台・特殊壺、二重口縁壺は共飲共食儀礼の象徴的な器物であり、被葬者への捧げものを表現した儀器とも言えるが、これが埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪）の起源となる資料である（図4）。中には埴輪と理解すべきものもあり、まさに古墳の出現を物語っている。

（3）古墳出土の石製模造品

「2. 神まつりの世界」では、自然を対象にした神まつりの祭具である石製模造品を取り上げたが、ここでは古墳に納められた石製模造品に着目する。石製模造品は、4世紀後半から6世紀初頭の古墳からも出土するが、その中心は古墳時代中期である。古くは実用品を忠実に模造した精巧な作りのものであったが、次第に副葬する古墳数が増加すると、小型になると同時に扁平化や形骸化する傾向が窺える。石製模造品を用いた祭祀・儀礼は、王権による新たな再編のもとで各地に波及したと位置づけられる。ところが、神まつりと古墳への副葬・葬送儀礼の道具が一致するという実態をどのように理解すべきか、古墳に埋葬された死者は果たして、神として扱われたのか。依然として明確な結論に至っていないものの、これも当時の他界観や死生観を探るうえで注目すべき点である。

（4）石枕と葬送儀礼

石枕は、遺体の頭部をのせるための石製の枕であり、その縁部には立花と呼ばれる石製品を差し込むための孔があげられている。ところが、これまでに立花が石枕に装着された状態で見つかった例はない。周囲に散らばった状態で検出されるため、埋葬前に使用された後、取り外されてばらば

らとまかれたと推定できる（図5）。死後、遺体を一定期間そのまま安置する殯（モガリ）の儀礼を行なう際に、立花を差し込んだ石枕が使用された可能性が考えられる。なお、石枕の出土例は西日本にもあるが、立花を伴ってはいない。

一方で、茨城県南部の霞ヶ浦・北浦、千葉県北部の印旛沼・手賀沼、現在の利根川下流域は、当時は水位が高く一つの広大な内海であったとされ、「香取海」などと呼ばれるが、その南岸の古墳で「石枕・立花」の出土例が集中している。内海の水運を利用した交流圏を基礎とし、こうした葬送儀礼や死生観・他界観が共有されていたことが推定できる。

(5) 埴輪とその性格

埴輪とは、古墳の墳丘や周溝の堤などに樹立されたものであり、大きくは円筒埴輪（円筒・朝顔形埴輪）と形象埴輪に分けられる。円筒埴輪は、器台や壺に由来しており、列状に並べることで墳丘を飾り立てるとともに、外界とは区別された神聖な空間を醸し出す効果があったと考えられる。一方、形象埴輪の性格をめぐっては、器財・人物・動物など多種多様な造形物があるが、これらを群像として配置することで、さまざまな場面（シーン）を表現した可能性が推定されている。なお、埴輪の種類や配置を読み解く一方で、表現方法や製作技術の違いから時期差・地域性に注目することも研究の重要な視点となる。

4. 葬送儀礼の変容 ―横穴式石室と仏教の受容―

これまで古墳時代の神まつりの祭具、古墳から出土する儀器・葬具、副葬品、および埴輪を中心に取り上げたが、これらのみで古墳時代の信仰すべてを語ることはできない。最後に「横穴式石室」および「仏教」の受容といった事象に着目してみることにする。

(1) 横穴式石室の受容とその特色

横穴式石室とは 横穴式石室とは、古墳の墳丘内部に構築された出入口をもつ埋葬施設であるが、複数回に亘る遺体の追葬行為を可能とする機能をもつ点が最大の特徴である。単葬を基本とする従来の竪穴系埋葬施設の構造とは大きく異なり、中国や朝鮮半島といった東アジアにおける横穴系諸墓制の潮流とも同調した動きを示す点、その採用や普遍化を契機として葬送観念の転換・変貌、社会構造の変革を促した点に大きな歴史的意義が認められる。

日本列島では、4世紀後半から末頃に朝鮮半島から「横穴式石室」という新来の墓制が伝播し、5世紀には九州・近畿地方を中心に展開したが、6世紀後半には日本列島各地に広く普及するようになる（写真5・6）。これは「黄泉国」の他界観と関連付けて理解する意見もあるように、新たな死生観をもたらしたとされる。

畿内型石室の歴史的意義 畿内型石室とは、5世紀末から6世紀初頭頃に畿内で成立した横穴式石室を指し、主に首長墓を中心に採用される点、他地域の首長墓への広範な伝播が見られる点、こうした伝播を契機として各地域における在地墓制の転換、横穴式石室の普及・定着を急速に促進させた点に意義があると位置づけられる。さらに、この畿内型石室の展開は、畿内政権による進出と

いう政治的側面を示すのみでなく、須恵器の主体部埋納という新しい他界観を基礎とする葬送墓制や死生観の変化を伴って各地に伝播した点に、畿内型石室の強力な浸透力の背景や歴史的意義が見出されている。

(2) 仏教文化の受容・展開と古墳の終焉

また、6世紀中頃に、朝鮮半島から伝来した仏教の受容をめぐっては、多くの政争を巻き起こしたが、一方で仏教という新たな宗教に基づく信仰とその文化が花開いた時期ともいえる。寺院の建立と信仰の広まりは、古墳時代に終焉を告げる一因ともなり、祭祀・儀礼にも変化をもたらした。古墳時代に続く7世紀代、すなわち飛鳥時代は「古墳（終末期古墳）」「神道」「仏教」の3つの信仰が錯綜時代といえるが、そうした中で新たな古代へと至る信仰の基礎が形成されていったと考えられる。

本稿は、拙編著 2021 の内容をもとに大幅な加除改筆を行ない、再構成したものである。

主な参考文献

- 小林孝秀 2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣
 小林孝秀編 2021『古墳時代のマジカルワールド』松戸市立博物館（令和3年度企画展図録）
 小林孝秀 2018「古墳からみた須恵器の変容－関東－」『季刊考古学』第142号（特集：須恵器の受容と各地の古墳文化）
 雄山閣
 近藤義郎 1995『前方後円墳と弥生墳丘墓』青木書店
 笹生 衛 2016『神と死者の考古学－古代のまつりと信仰－』歴史文化ライブラリー 417 吉川弘文館
 白井久美子 2002『古墳から見た列島東縁世界の形成』千葉大学考古学叢書 2 平電子印刷所
 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀－古墳出土の石製模造品を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館
 白石太一郎 2009『考古学からみた倭国』青木書店
 土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』学生社
 土生田純之 1998『黄泉国の成立』学生社
 土生田純之 2006『古墳時代の政治と社会』吉川弘文館
 福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学新世紀セミナー 大阪大学出版会
 松木武彦 2007『列島創世紀』全集 日本歴史 第1巻 小学館
 若狭 徹 2021『埴輪は語る』ちくま新書 1576 筑摩書房

◆第3講◆ 古墳時代の墓制・葬送儀礼と死生観



写真1 建鉾山〔福島県白河市〕



写真2 天白磐座遺跡〔静岡県浜松市〕



写真3 大寺山洞穴遺跡第1洞の入口部〔千葉県館山市〕



写真4 大寺山洞穴遺跡第1洞（内部より）〔千葉県館山市〕

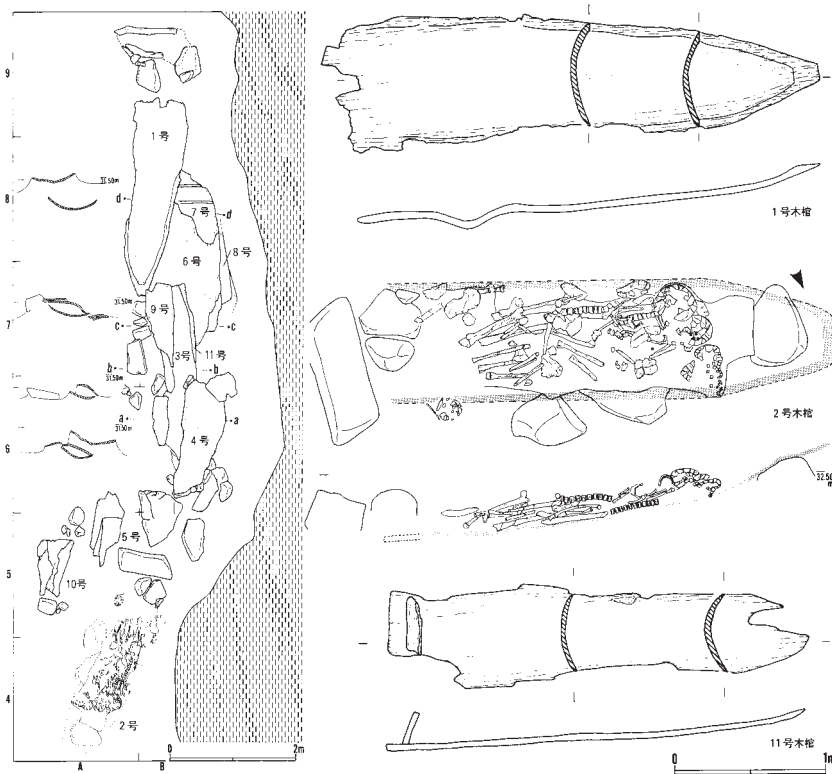


図1 大寺山洞穴遺跡第1洞の木棺出土状況(左)および出土した木棺(右)

写真1～4 小林孝秀撮影
 図1 岡本東三・押野一貴編1996『大寺山
 洞穴―第3・4次発掘調査概報―』千葉
 大学文学部考古学研究室より引用

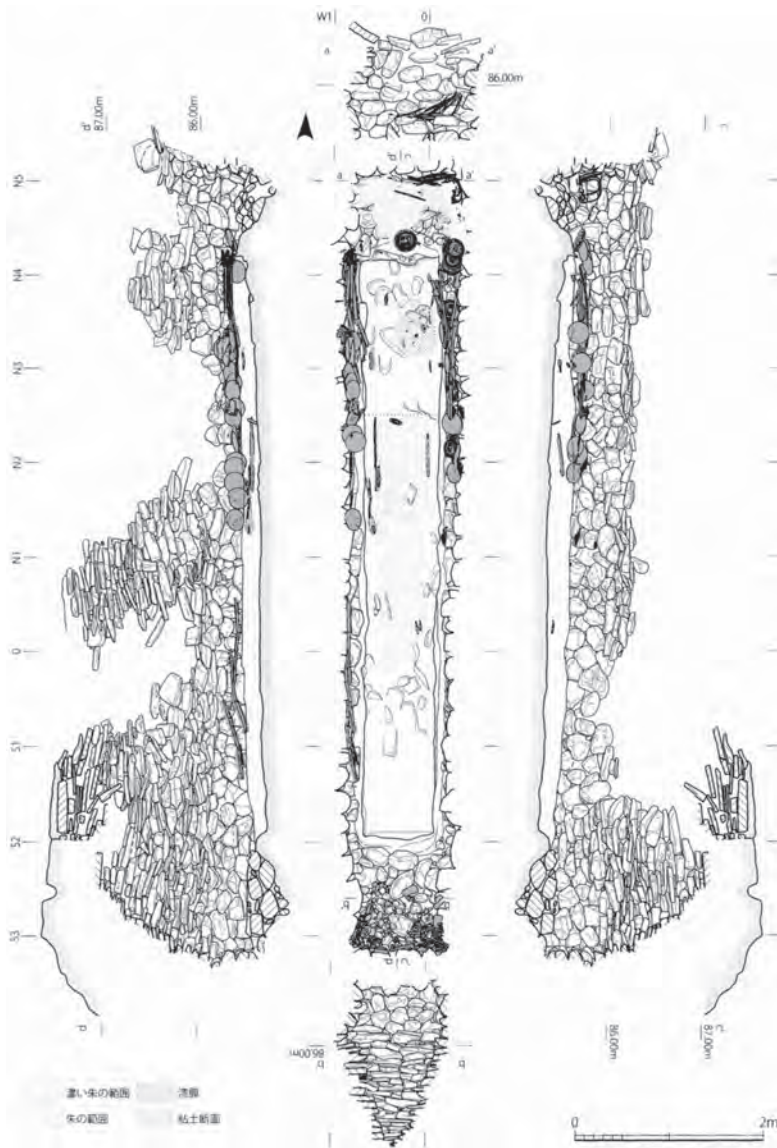


図2 黒塚古墳の埋葬施設および副葬品出土状況



図3 島の山古墳前方部の埋葬施設および副葬品出土状況



図4 特殊器台の遷り変わり

- 図2 岡林孝作ほか編 2018『黒塚古墳の研究』八木書店より引用
- 図3 河上邦彦ほか編 1997『島の山古墳調査概報』学生社より引用
- 図4 安原貴之 2011『埴輪のはじまり—大和の特殊器台とその背景—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館より引用

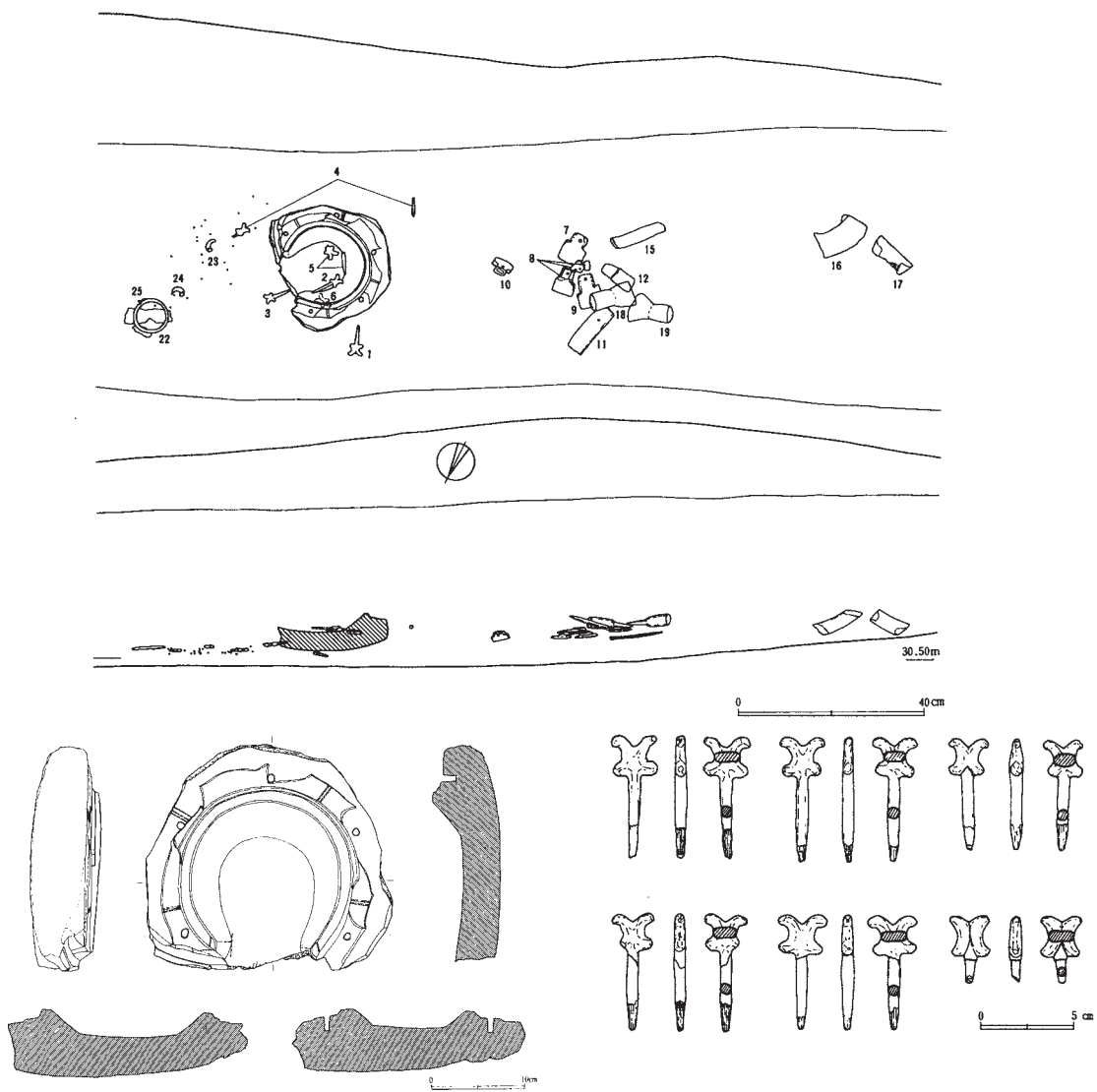


図5 上赤塚1号墳の埋葬施設および出土した石枕・立花



写真5 観音塚古墳の横穴式石室（玄室）



写真6 観音塚古墳の横穴式石室（羨道）

図5 古内茂・栗田則久編 1982『千葉東南部ニュータウン 13-上赤塚1号墳・狐塚古墳群-』住宅・都市整備
 公団・千葉県文化財センターよりそれぞれ引用
 写真5・6 小林孝秀撮影

近世の葬送墓制と祖先信仰

早稲田大学人間科学学術院 教授 谷川 章雄

1. 近世墓の様相

近世の墓は、中世社会から近世社会への移行にともなう宗教的、社会的、政治的变化を背景に成立し、さらに近世社会の中で発展した。ここでは近世墓の様相について述べることにしたい（谷川2013）。

(1) 火葬から土葬への転換

中世から近世の葬法は、基本的に火葬から土葬へ転換していく。村落の墓では中世には火葬が主流であったが、16世紀後半ごろから土葬が広がり始め、多くは17世紀に土葬になった。藤澤典彦は、この土葬への転換について、中世に遺棄葬あるいはそれに近い土葬を行ってきた階層が、遺体を墓地に土葬するようになったことに起因すると考えている（藤澤2007）。

ただし、中世から近世への火葬から土葬への転換は、基本的には成り立つが、地域性や階層性とも関わって複雑な様相を呈していた。18世紀以降の大坂では火葬の割合が土葬よりも圧倒的に高かったとされる。伊丹郷町でも、17世紀後半ごろに土葬の円形木棺（早桶）が出現し、18世紀に入って火葬に転換していた。

江戸では、17世紀代には火葬の割合が比較的高い墓地と低い墓地があったが、18世紀以降になると火葬の占める割合が全体に低くなり、土葬が主体となる。また、17世紀には江戸のほとんどの寺院に火葬場があったが、その後、人口密集地域の寺院は火葬場を廃止・移転させ、幕末の火葬場は周辺地区に存在した。

増上寺および寛永寺の徳川将軍家墓所では、寛永9年（1632）に没した2代秀忠以降の歴代将軍は土葬である。正室、生母などの女性は、崇源院（2代秀忠正室）〔寛永3年（1626）没〕以降火葬であったが、桂昌院（5代綱吉生母）〔宝永2年（1705）没〕から土葬になる。

こうした将軍家をはじめとする武家の墓の土葬への指向の背景には、儒葬や神葬祭などの影響が想定されるが、同時に土葬であった将軍墓を頂点とする墓制の秩序へ組み入れられていくことでもあった。

(2) 座棺の普及

中世から近世の葬法の変化としては、座棺の普及があった。これは土葬の墓の埋葬方法である。村落の墓では、火葬から土葬へ転換する17世紀に円形木棺（早桶）・方形木棺などの座棺が普及した。近畿地方では、円形木棺（早桶）・方形木棺などの座棺は中世後期に出現し、座棺の普及の様相には地域性が見られる。

江戸では、16世紀末から座葬の円形木棺（早桶）や横臥屈葬の長方形木棺が見られるが、17世紀後葉までに長方形木棺が姿を消し、17世紀後葉になって座葬の甕棺が出現する。また、江戸の周辺村落では、17世紀前半から中頃にかけて地域差をもちながら、横臥屈葬の長方形木棺から座葬の円形木棺（早桶）へと変化した。

勝田至は、中世の座棺の成立の背景には、禅宗の影響を受けた「死者を仏として葬る」という観念があったと述べている（勝田 2006）。その後、17世紀に座棺が普及した結果、墓地内の墓道に面して墓標が造立され、その地下には遺体の正面が墓道を向くように座棺を埋葬したのではないかと推定される。棺に記された遺体の向きを示す墨書などがそれを示している。

(3) 近世寺院の成立

竹田聴洲は近世・近代に存在した浄土宗の寺院の過半が全国を通じて文亀～寛永年間（1501～1643）、すなわち戦国時代末期から江戸時代初期の約1世紀半に成立し、とくにその後半、天正～寛永年間（1573～1643）の約70年間にその事例が圧倒的密度で集中することを指摘している（竹田 1971）。近世寺院が成立した16世紀後葉から17世紀前半は、火葬から土葬への転換、座棺の普及という近世墓の成立時期と重なっており、近世寺院と近世墓の成立が深く関わっていたことが想定できる。こうした近世寺院のあり方がその後の檀家制度につながっていく。

(4) 近世墓標の造立

17世紀は、全国的に見ると、近世墓標が出現する時期でもあった。近世墓標の造立の背景には仏教の土着化があったと考えられている。近世寺院は近世墓標の普及とも密接に関係していた。

墓標には地域性と斉性がうかがわれる（図1）（谷川 1988）。たとえば、東北の「自然石形」、江戸および周辺の「板碑形」「舟形」、奈良などの「尖頭形」、大坂などの「一石五輪塔」をはじめとして、17世紀代の墓標には地域によってさまざまな形態的特徴があった。一方、全国的な斉性をもつ墓標としては、頭部がかまぼこ状を呈する「櫛形」が18世紀代に普及する。また、「櫛形」に遅れて出現した「角柱形」も19世紀に普及した斉性を有する墓標であった。

(5) 墓と家意識

墓標の変遷の背景には、死者に対する供養の変化があったと考えられる。地域性のある一観面の墓標から斉性をもつ多観面の頭部かまぼこ状の「櫛形」墓標、さらに「角柱形」墓標への変遷のなかで、墓標に刻まれる被葬者の数が増加していった。その背景には、近世的な家を単位とした供養へという観念の変化を見ることができる。すなわち、墓標の斉性はこのような家意識を背景とした死者供養の方式の変化がほぼ18世紀代にあったことを示唆している。

(6) 墓の階層性

①墓標の階層性

家意識は家の階層性とも関わっていた。墓標の階層性は、形態、高さ、戒名を指標としていた。墓標の形態では、五輪塔・宝篋印塔などのいわゆる塔形ものや「笠塔婆」は格式が高い。また、墓標の高さや刻まれた戒名が墓標の階層性を示していたことは、天保4年（1831）4月に出された百姓、

町人が4尺（121.3 m）の墓標を造立し、院号・店士号等をつけることを禁ずるという「御触書」などから明らかである。

千葉県市原市高滝・養老地区の墓標の調査では、家意識と階層性の問題について次のように考察した（図2）（谷川1989）。家を強く意識し始めたことを背景として、各家で墓標を造立することが広がり、いわゆる一観面の「板碑形」「舟形」墓標にかわって多観面の「櫛形」墓標が盛行するようになると、院号居士・大姉など上位の戒名をもてない家では夫婦、兄弟姉妹、親子などをまとめて一基の墓標にまつことが多くなる。これは単なる経済的な理由にとどまらず、むしろ強い家意識のあらわれと考えられる。

一方、院号居士・大姉などの戒名をもつ家では18世紀初頭ごろから個人の墓標を造立することの方が一般的であった。言い換えれば、こうした墓標のあり方が家の格式の表徴であって、墓標の高さや形態の上での「笠塔婆」墓標も同様に認識されていた。多観面の墓標が盛行するなかで墓標が大型化していくことも右のような家意識を背景としていたのである。

この多観面の「櫛形」墓標が主流となる享保年間（1716～1735）以降は、戒名の格式が確立し、定着していく時期でもあった（表1）。新たに院号居士・大姉、居士・大姉、信士・信女、禪定門・禪定尼などの戒名の格式が生まれ、家の格式の一方の表徴となっていく。そして、同じ頃童子・童女などの子供の戒名が広がっていくのは、家の維持、永続の願いから子供への関心が高まっていったことのあらわれであるように思われる。すなわち、家に対する意識の高揚が墓標や戒名の格式を受容する上での観念的母胎となり、家を単位とする死者供養はそうした家意識と深く結びついていたといえる。

②江戸の墓制にみる階層性

墓にあらわれた階層性は、江戸の墓制においても顕著に認められる。それは、将軍家から庶民まで多種多様な身分・階層の人々が差別化され、共生していた江戸の社会の一断面を鮮やかに示している。

埋葬施設では、石槨石室墓は将軍家の墓にあたり、石室墓は主に大名墓である。木槨甕棺墓は高禄の旗本や藩士などの墓である。甕棺墓は低禄の旗本および藩士などの墓にあたる。方形木棺、円形木棺（早桶）は、御家人などの下級武士や町人の墓と考えられる。なお、当主・正室・側室・子女のような家の中の格のちがいがいも、埋葬施設の構造に反映していた。

甕棺が武家の格式を示していたのは、安政の大獄で吉田松陰が刑死したとき、門人たちが遺体を引き取るために「大甕」を購入したことなどの事例が物語っている。（芳賀登1987）。

将軍家の墓である石槨石室墓を簡略化した石室墓は主に大名墓であり、旗本などの墓には木槨甕棺墓、甕棺墓という序列が認められる。藩士の墓も同様である。すなわち、ここでは将軍と大名、旗本などの幕臣、藩士という3種類の墓制の秩序が並立していたように見えるのである。

墓標も埋葬施設と同様に家の格式を示すものであった。将軍家は宝塔であり、大名家や旗本家は五輪塔・宝篋印塔などのいわゆる塔形ものや「笠塔婆」を用いることが多い。また、将軍家、大名

家の墓標は基壇の上に造立されていることが多く、高さも高いのである。

(7) 墓と個人意識

墓に個人意識が反映されるのも、近世の墓の様相のひとつであり、これは江戸などの都市において顕著であったと考えられる。

塚本学は、江戸時代を通じて次第に個人の持ち物が増えていき、とくにそうした意識が広がっていくのは江戸での影響が大きく、そのひとつとして墓の副葬品の中の個人の持ち物について注目している（塚本 1993）。

江戸の中小寺院の墓の副葬品の中では、煙管の多くは個人の持ち物の可能性が高く、数珠や櫛は宗教的な意味も考えられるが、個人の持ち物でもあったように思われる。また、袴の腰板や入れ歯、扇子、柄鏡、磁器碗や漆器椀、簪、陶器の水滴、玩具なども、基本的には個人の持ち物であろう。また、将軍墓・大名墓の副葬品の中に、文房具や装身具、化粧道具のような個人の持ち物が多く見られるように、遺体とともに個人の持ち物を墓に入れるという習俗が、ほぼ18世紀以降に身分・階層間を徐々に下降したと考えられる（谷川 2011a）。

また、将軍墓・大名墓の墓誌も、個人を示すものであった（谷川 2011b）。旗本などの幕臣や藩士などの土葬墓にともなう墓誌は、18世紀後葉以降19世紀に入ると事例数が増加するが、とくに没年月日と姓名などを記した簡素な墓誌は、中国的な墓誌の範疇からは外れた被葬者個人を示すものであった。

2. 近世墓制の変遷

近世の墓制の出発点は、近世寺院の成立に関わって、火葬から土葬への転換、座棺の普及、近世墓標の出現という様相が見られる17世紀のことであったと考えられる。その後、墓標の変遷に見るように、斉一性を有する「櫛形」が普及する18世紀代には、家意識を背景にした家を単位とする死者供養が広がり、都市や村落の墓制における墓標や埋葬施設に、社会を反映した階層性がうかがわれるようになる。

この時期すなわち18世紀には、とくに都市に顕著な形で、副葬品の中の個人の持ち物や、旗本などの幕臣や藩士などの墓にともなう没年月日と姓名などを記した簡素な墓誌など、個人意識の反映が墓に認められた。すなわち、近世の墓は17世紀を通じて成立し、18世紀になって完成したのである。

3. 江戸の葬送墓制と祖先信仰

(1) 民俗学の祖先信仰

民俗学の祖先信仰、死生観・霊魂観については、柳田国男によって次のように明らかにされてきた（藤井 1976）。

死者が出た場合、葬儀に始まって七日七日の中陰法要、百ヵ日忌、一周忌、三回忌などの年忌法要を重ねていくが、供養は三十三回忌など一定の年限をもって打ち切る習俗が全国的にみられる。

このときをもって死霊はその個性を失い、祖霊という集合的な霊体に合一される。この祖霊とは、汚れたホトケ・ミタマとは異なって清まったカミであり、多くの場合生前の居住地からあまり遠くない山にあって子孫を見守るとされる。カミとなった祖霊は、毎年時を定めて子孫の家を訪問し、家の繁栄を守護するといわれる。その代表的な時は盆と正月の行事であった。また、死霊が供養を重ねながら祖霊へ変化していくプロセスは、人間が誕生し成人し死に至る通過儀礼に対応する。

(2) 近世の祖先信仰をめぐって

これまで述べてきた近世の葬送墓制の考古学は、こうした民俗学が明らかにした祖先信仰とどのように関わるのであろうか。

第一に、民俗学の祖先信仰には、仏教的な要素が希薄であるという点が指摘できる。近世には墓標だけでなく位牌や仏壇が普及する時期であった（谷川 2022）。これらは仏教的死者供養の表徴であり、言い換えれば、近世における仏教と祖先信仰の関係が問題になる。

第二に、近世に個人の死に際してその戒名を刻んだ石製墓標という恒久的な墓上施設を造立することは、三十三回忌などの弔い上げを経て死者の霊魂が個性を喪失し祖霊へと昇華するという、民俗学の説く祖先信仰の観念と矛盾するものではなかったか。この矛盾は新しい墓標を造立する一方で古い墓標を無縁化し、その家の墓標群をまつる場として認識することによって、家を媒介にして止揚されたという。墓標に刻まれる被葬者が増加して「先祖代々之墓」に至る過程は、おそらく家に対する意識が強くなるにしたがって、そうした矛盾を解消していくことでもあったといえる。同様な様相は位牌にもうかがわれるように思われる。

第三に、民俗学の祖先信仰では、儒教との関係が論じられていない。江戸などの都市の将軍家や大名家の墓制には儒教の影響がうかがわれるが、そのひとつに墓誌がある（谷川 2011b）。ほぼ18世紀になると、土葬にともなう、儒教と関わる中国的な墓誌が将軍墓、大名墓、儒者などに用いられるようになる。将軍の墓誌は林家や新井白石が作成に関わっていた。また、江戸の墓における儒教などの影響は、副葬品である六道銭にも見ることができる（谷川ほか 2009）。寛保2年（1742）の六道銭禁令の町触が出された18世紀中葉ごろから六道銭の出現率が低下し、とくに格式の高い大名墓や高禄旗本の墓、旗本などの墓である甕棺墓では著しい。六道銭禁令の背景にある儒教などにつながる近世的な経済思想の論理が武家の間に浸透していったのであろう。

第四に、民俗学の祖先信仰は村落中心のものであった。江戸などの都市の様相を含めた近世の葬送墓制を考究する必要があるだろう。すなわち、近世の祖先信仰は、民俗学のいうような祖霊に一元化されるものでは必ずしもなく、仏教との関係を有し、儒教を含めた階層性が認められるとともに、都市・村落の社会と心性を背景とした複雑な様相を呈するものであったと考えられる。

◆第4講◆ 近世の葬送墓制と祖先信仰

主な参考文献

- 勝田 至 2006 『日本中世の墓と葬送』 吉川弘文館
- 竹田聰洲 1971 『民俗仏教と祖先信仰』 東京大学出版会
- 谷川章雄 1988 「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』 288 ニューサイエンス社
- 谷川章雄 1989 「近世墓標の変遷と家意識」『史観』 121 早稲田大学史学会
- 谷川章雄 2004 「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』 吉川弘文館
- 谷川章雄 2009 「江戸の六道銭」『六道銭の考古学』 高志書院
- 谷川章雄 2011a 「江戸の墓と家と個人」『死生学年報 2011』 東洋英和女学院大学死生学研究所
- 谷川章雄 2011b 「江戸の墓誌の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 169 集
- 谷川章雄 2013 「近世の墓」『事典墓の考古学』 吉川弘文館
- 谷川章雄 2022 「位牌・墓標と葬送」『無縁社会の葬儀と墓』 吉川弘文館
- 塚本 学 1993 「江戸時代人の持ち物」『特別展「江戸のくらし」 <近世考古学の世界> 記念講演会・座談会報告書』 新宿区教育委員会
- 坪井洋文 1970 「日本人の死生観」『民族学からみた日本』 河出書房新社
- 芳賀 登 1987 『葬儀の歴史』 雄山閣
- 藤井正雄 1976 「基層としての民間信仰」『日本民俗学講座』 3 朝倉書店
- 藤澤典彦 2007 「中世における火葬受容の背景」『墓と葬送の中世』 高志書院

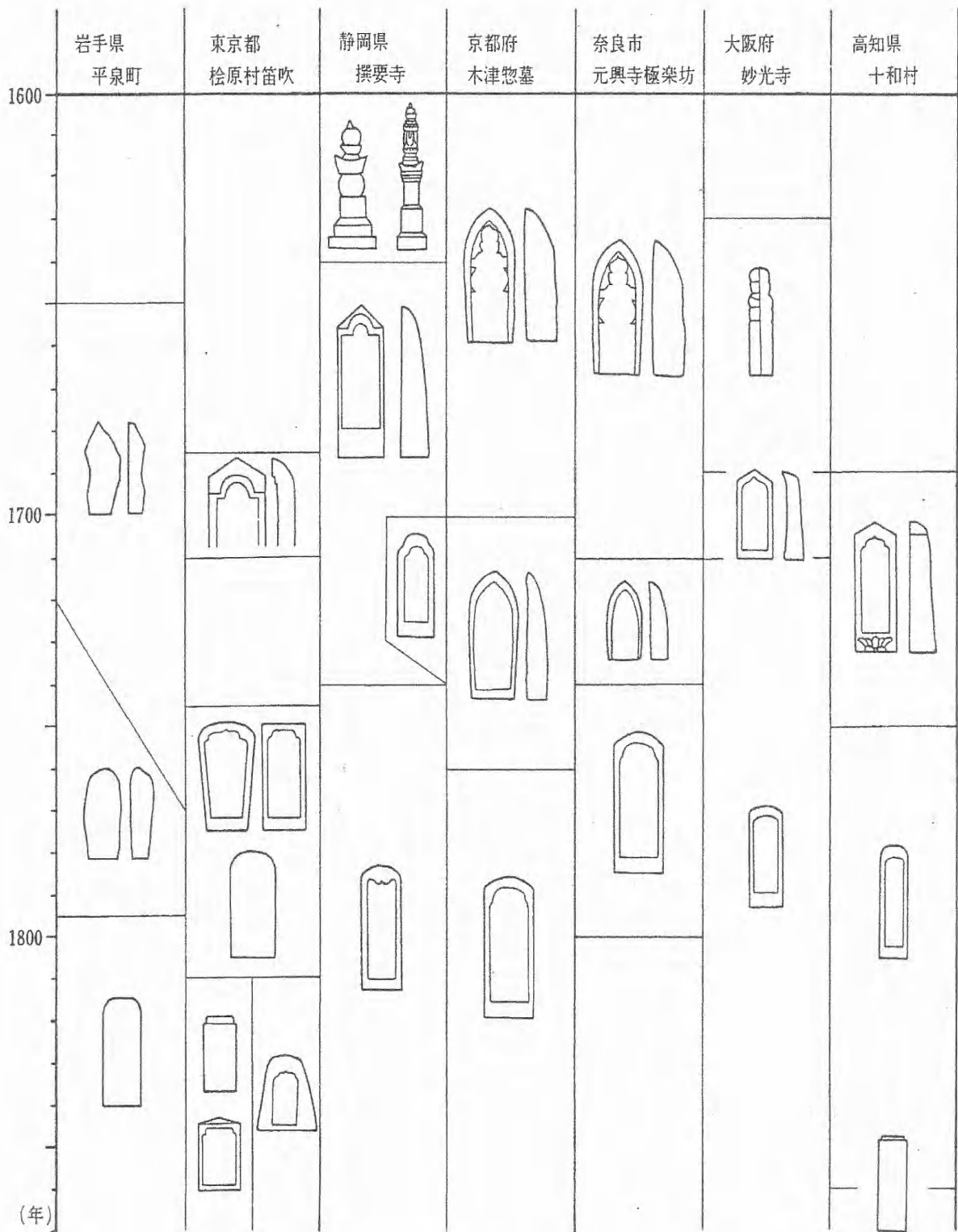


図1 各地の墓標の変遷(谷川1988)

年 代	戒 名	院号 居士 大姉	院号 信士 信女	院号 童子 童女	院 号	居士 大姉	信士 信女	禅定門 禅定尼	禅門 禅尼	童子 童女	そ の 他	位戒 なし	計
慶長6～慶長15 (1601～1610)													
慶長16～元和6 (1611～1620)													
元和7～寛永7 (1621～1630)						1							1
寛永8～17 (1631～1640)							1						1
寛永18～慶安3 (1641～1650)													
慶安4～万延3 (1651～1660)													
寛文1～10 (1661～1670)					1		1	1					3
寛文11～延宝8 (1671～1680)							2	4				1	7
天和1～元禄3 (1681～1690)					1			1			1		3
元禄4～12 (1691～1700)					1		2	5				1	9
元禄14～宝永7 (1701～1711)					1		5	4		3			13
正徳1～享保5 (1711～1720)		3	1			1	8	4		1		2	20
享保6～15 (1721～1730)		1					7			1		1	10
享保16～元文5 (1731～1740)		1	1		1	1	10	1		1		1	17
寛保1～寛延3 (1741～1750)			2			2	9			5			18
宝暦1～10 (1751～1760)		3	2	1	2	2	11		1	4			26
宝暦11～明和7 (1761～1770)		1	3			1	11	1	1				18
明和8～安永9 (1771～1780)		2	2		1	2	10			1			18
天明1～寛政2 (1781～1790)		1	3			2	13	1		1	1	1	23
寛政3～12 (1791～1800)		1	2				15	1		6			25
享和1～文化7 (1801～1810)		1	3				23			5			32
文化8～文政3 (1811～1820)			4			3	14	1		3	1		26
文政4～天保1 (1821～1830)			2				10					1	13
天保2～11 (1831～1840)		1	1				7	1		3			13
天保12～嘉永3 (1841～1850)						3	12						15
嘉永4～万延1 (1851～1860)		1				4	7	1		6			19
文久1～明治3 (1861～1870)		1				5	2						8
計		17	26	1	8	27	180	26	2	40	3	8	338

表1 養老地区の墓標に見る戒名の変遷(谷川1989)

弥生時代の祖先祭祀と他界観

東京大学 名誉教授 設楽博己

弥生時代前期の神奈川県域を代表する遺跡が、大井町中屋敷遺跡である（図2）。台地上に土坑が複数検出されたが、土坑群が弧状をなしているのは、縄文時代の環状集落の形状を踏襲したからである。環状集落は居住域の中心広場に墓地が設けられることも多く、死者を中心に生活が営まれたことを示す。縄文時代中期から後期にかけて寒冷化が進むと環状集落は解体して分散居住が進んだが、その一方で墓地は独立して大型化し、東日本の各地で環状列石が築かれた（図1-2）。祖先祭祀が集落構成員や地域社会の結集の原点だったと推測される。

縄文時代晩期から弥生時代にかけて、中部高地地方から南東北地方は再葬墓が発達するが、墓坑が環状あるいは弧状に配置された遺跡が多い（図1-3）。その起源は環状集落に求められるのであり、再葬墓に祖先祭祀の色合いが濃いことがわかる。居住域と墓域が分離しているのは分散居住の結果であって、死者を遠ざけようとする意識が働いたからではない。

中屋敷遺跡の土坑群の性格は不明だが、弧状をなす点に縄文文化の伝統がうかがえる。再葬に伴う蔵骨器の土偶形容器は縄文時代晩期の中空の遮光器土偶に由来するものであり（図2）、再葬墓が縄文文化の祖先祭祀の延長線上にあることがわかる。北関東地方にも、弥生時代中期前葉に土坑が環状にめぐる遺跡がある（図3）。この遺跡もそうだが、中屋敷遺跡が中核的な集落だといっても竪穴住居も見られないような規模の小ささが目立つ。

*

こうした文化が大きく変わるのが弥生時代中期中葉である。小田原市中里遺跡は足柄平野の微高地に立地する農耕集落である。竪穴住居跡が100棟以上検出され、その規模の大きさを物語る。水田跡は見つかっていないが、いろいろな状況から灌漑をおこなう水田が営まれていたことに疑問はない。それ以前の状況からすれば、周辺の台地などから人々が集まってつくりあげたムラであると推定される（図4）。

この遺跡は数棟の竪穴を住まいとしたいくつかの居住集団から成り立っているが、住居が環状に並んでいる様子がうかがえる（図5）。それに加えて土偶形容器が出土していることからすれば（図6）、それ以前の文化を伝統的に保持しているといつてよい。一方、革新的なことはいろいろとあるが、本稿にかかわる現象として、独立棟持柱建物と方形周溝墓を取り上げたい。図5を見ると、独立棟持柱をもつ掘立柱建物が中央の居住集団に集中していることがわかる。小林青樹は、この建物が再葬墓の性格つまり祖先祭祀を引き継いでいると推測しているので、独立棟持柱建物は祖先祭祀にかかわる建物であった可能性が考えられる。

大阪府池上曾根遺跡は拠点的な環濠集落であり、環濠で囲まれた居住域のほぼ中央に巨大な独立棟持柱建物が建っている（図7・8）。高床倉庫であるが、正面に巨大な井戸をもち、水の祭りもおこなっていることなどからたんなる倉庫ではない。稲作儀礼にかかわる建物であり、その儀礼は祖先の国からもたらされたイネの魂を祭る祖先祭祀だとするのが妥当だろう。

池上曾根遺跡は方形周溝墓群が環濠の外側に位置しているが（図8）、このように弥生時代になると西日本では墓域が居住域と分離する。関東地方では中期中葉になると中里遺跡などに方形周溝墓が導入されて再葬墓との置き換わりが進むが、西日本と同じように居住域と墓域が分かれ、集落設計自体が再葬墓の時代から変化を遂げた。

環濠集落のルーツは中国、朝鮮半島の大陸にあり、新石器時代の中国の環濠集落は墓域が環濠の外側にある。弥生時代の集落設計の変化は大陸からの影響によるのであるが、それはたんに集落設計の変化にとどまらず、生者と死者の住む世界をきっぱりと分けるように他界観自体が変質した可能性がある。

*

北部九州地方では、弥生時代の祖先祭祀は墓とそれにともなう施設でおこなわれたようである。佐賀県吉野ヶ里遺跡は弥生時代中期前葉に墳丘墓が築かれ、同時期から中期後半までの甕棺墓が墳丘墓を目指すように列をなしておよそ600mにわたってつくられた。後期になるとその軸線上に大型の建物が建てられた（図9）。軸線上に墓と大型建物を配置した例は佐賀県柚比本村遺跡でも知られており、その遺跡では軸線上にさらに祭祀用の土器が廃棄された状態で検出された。吉野ヶ里遺跡と同様に、墓と建物の年代が異なる。このことは、のちの時代の人々が墓に眠る人を顕彰するかのよう祭祀施設を設けて祭りをおこなったことを示しており、その祭りが祖先祭祀であることは疑いない。

軸線上に重要な施設を配置する設計方法はそれまでの弥生文化に認めることはできない。それに対して中国では早くから認められるので、こうした施設配置ならびに祖先祭祀の方法は中国に由来するとみてよい。中国では殷代から宗廟が墓上に設けられる。漢代にはそれが墓前に移動するが、いずれにしても大きな建物である宗廟で祖先祭祀をおこなうのであり、墓とそれにともなう施設が祖先祭祀の場であった。

このように、弥生文化といっても地域や時期が違えばその内容に大きな差があることがわかる。そしてそれは物質文化ばかりではなく祖先に対する意識や他界観という思想的な分野にまで及ぶ。東日本の初期弥生文化は、縄文文化の祖先祭祀や死者に対する意識を継承した。中期中葉にそれが大きく変化するのは、生者と死者を分離して祖先祭祀を居住域でおこなう近畿地方の影響によるものであった。そこにかがえるのは縄文文化からの変化であるが、それは中国や朝鮮半島からもたらされた他界観によるのであろう。北部九州地方では、墓と建物が規則正しく配置されて祖先祭祀をおこなったように、中国からの影響がよりつよくあらわれている。

このようにみてくると、縄文文化に大陸の文化が加わり、そして弥生文化独自の祖先祭祀が生ま

れたのであり、他界観も同様の変化があったと思われる。かつて山内清男は、弥生文化は縄文伝統と大陸と固有の三つの要素から成り立つとしたが、そうした多層性は祭祀や他界観にもうかがうことができるのである。

主な参考文献

秋山浩三 2006 『弥生実年代と都市論のゆくえ 池上曾根遺跡』新泉社

大島慎一 2000 「神奈川の弥生文化からみた中里遺跡」『小田原市遺跡調査発表会発表要旨』小田原市教育委員会

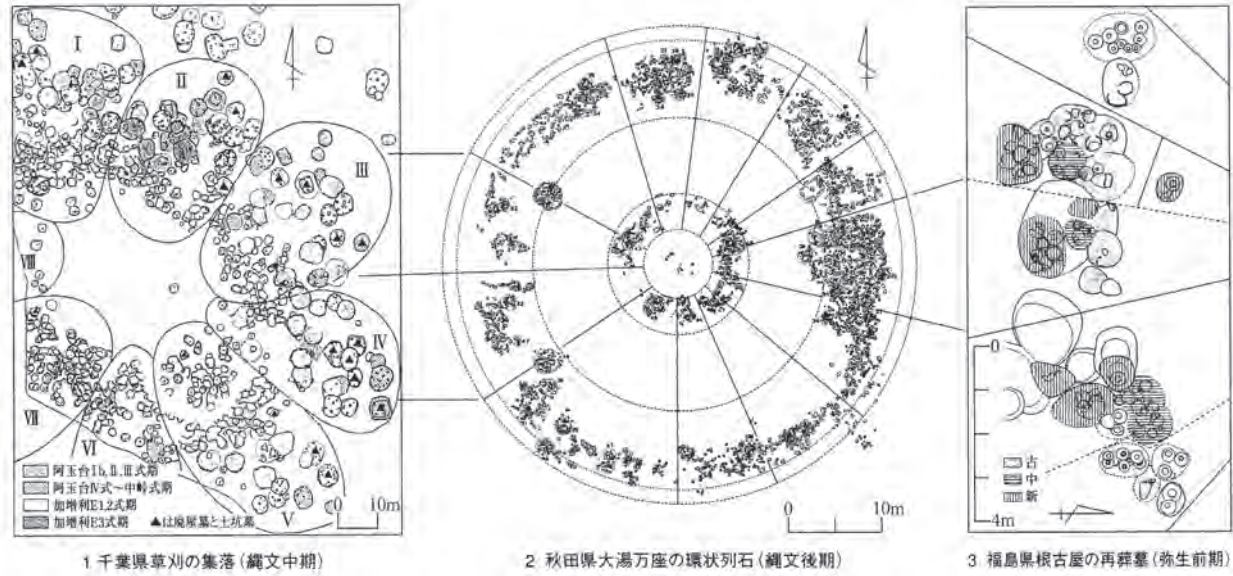
小林青樹 2003 「縄文から弥生への祭祀と墓制の変容」『第4回大学合同考古学シンポジウム 縄文と弥生－多様な東アジア世界のなかで－予稿集』大学合同考古学シンポジウム実行委員会

設楽博己 2008 『弥生再葬墓と社会』塙書房

設楽博己 2019 「弥生時代の世界観」『考古学講義』ちくま新書 1406 筑摩書房

七田忠昭 1994 「吉野ヶ里遺跡の大型建物」『考古学ジャーナル』379 ニューサイエンス社

山内清男 1939 『日本遠古之文化 補注付・新版』先史考古学会

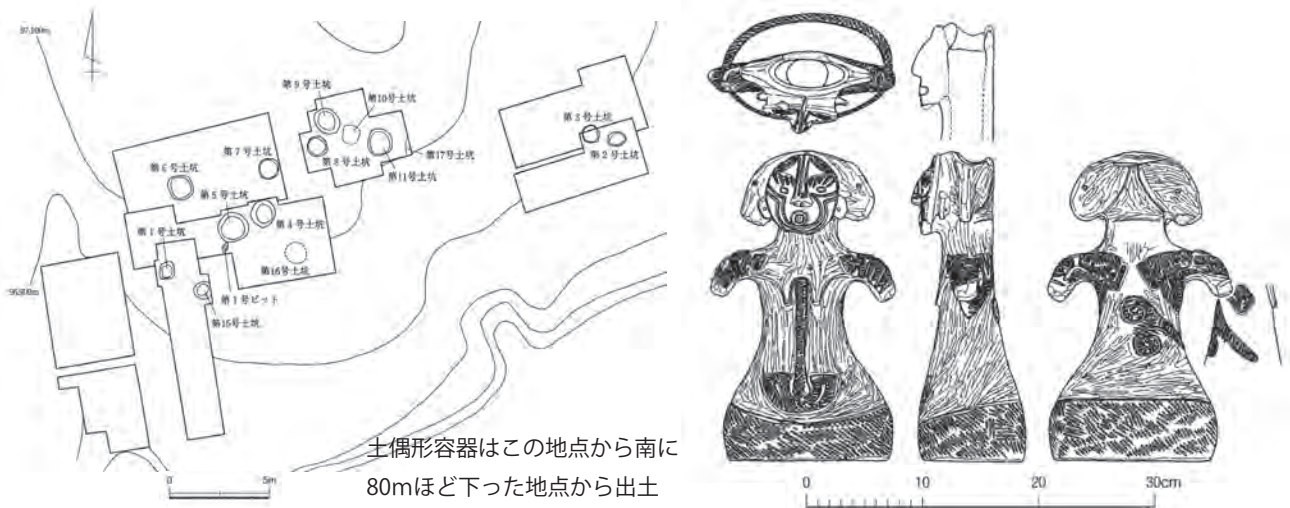


1 千葉県草刈の集落 (縄文中期)

2 秋田県大湯万座の環状列石 (縄文後期)

3 福島県根古屋の再葬墓 (弥生前期)

図1 環状集落・環状列石と弥生再葬墓 (設案図)



土偶形容器はこの地点から南に80mほど下った地点から出土

図2 中屋敷遺跡の遺構 (報告書より) と土偶形容器 (設案図)

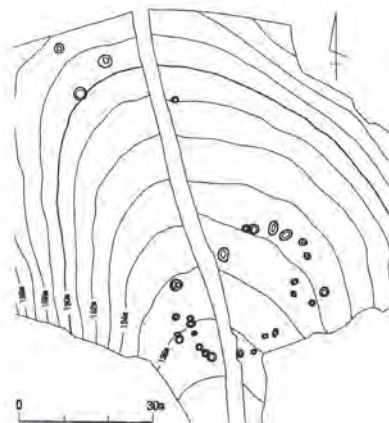
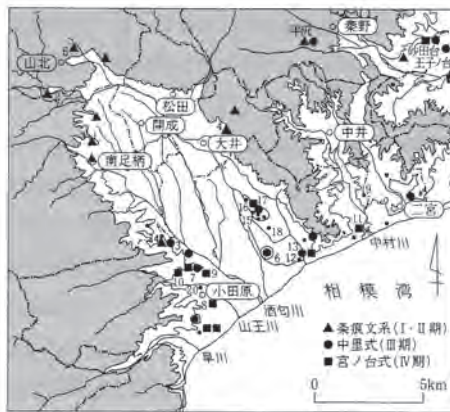


図3 群馬県神保富士塚遺跡 (報告書図設案トレース)



	縄文時代		弥生時代				
	晩期	前期	Ⅰ▲	Ⅱ▲	Ⅲ●	Ⅳ■	Ⅴ◇
1 怒田上原							
2 内山尻							
3 府川諏訪							
4 中屋敷							
5 堂山							
6 中里							
7 久野山ノ神							
8 谷津(小田原)							
9 多古白山							
10 久野中里							
11 羽根尾壇の上							
12 国府津町畑							
13 国府津三ツ俣							
14 北ノ窪小原							
15 千水							
16 水曾							
17 下曾							
18 高野							
19 野下							
20 久野下							

図4 足柄平野周辺の遺跡 (大島 2000 より)



図5 神奈川県中里遺跡の遺構 (報告書改変)

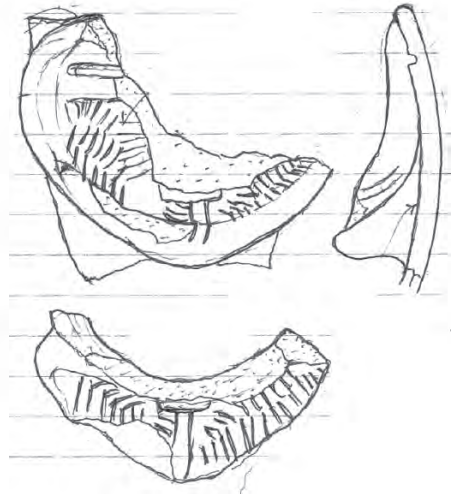


図6 中里遺跡の土偶形容器 (スケッチ)



図7 独立棟持柱建物の再現 (秋山 2006 より)

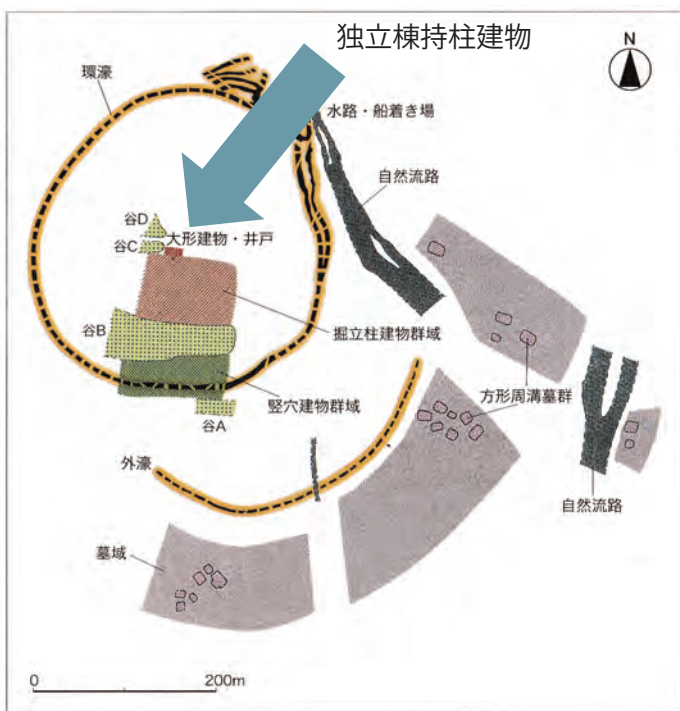


図8 大阪府池上曾根遺跡 (秋山 2006 より)

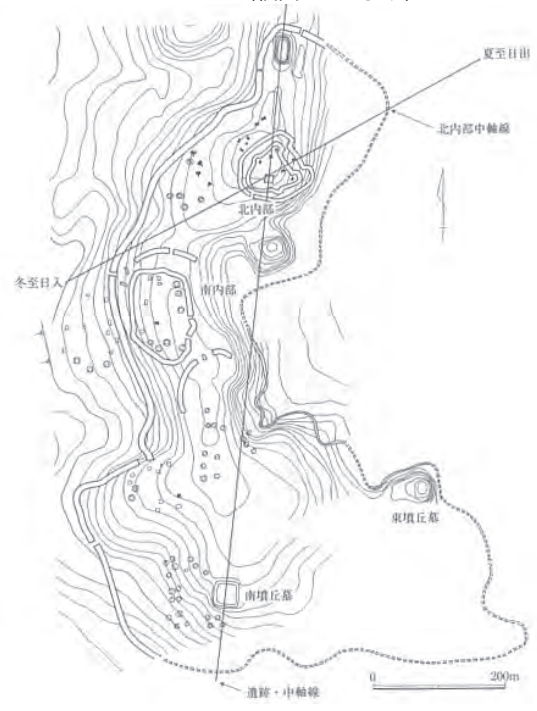
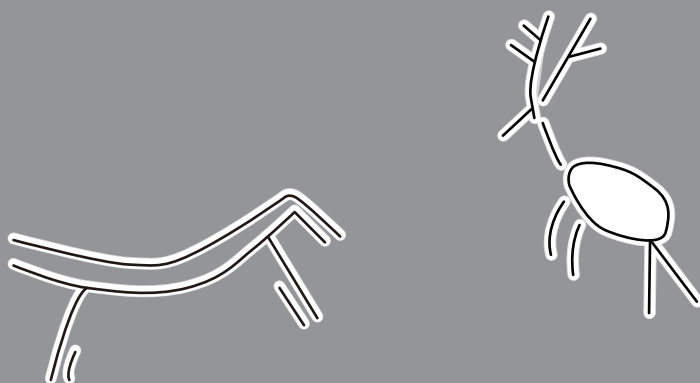


図9 佐賀県吉野ヶ里遺跡 (七田 1994 より)



令和5年度 考古学ゼミナール
考古学で探る「この世」と「あの世」

発行日 令和5(2023)年10月14日

編集・発行

神奈川県教育委員会 生涯学習部 文化遺産課 中村町駐在事務所
(神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

電話:045-252-8661(平日9時~17時)

Fax:045-252-8663



埋文センターHP